

# 源氏物語評釈

桐壺

一

## 第一帖 桐壺 評釈

〔旧注〕此卷の名は、すなはち此卷に「つぼねは桐壺なり」といへる詞をもちて名付たる也。一名は壺前裁といふ。是も「おまへのつぼせんざい」のさかりなるを」とある詞によりてなり云々。

〔新〕こを卷の名とせしは、此卷に光源氏君の母御息所の局をきりつぼ也といひ、且専ら此御息所の事をいふ卷なれば也。或抄に「壺前裁とも名づけし」といふは、「おまへのつぼ前裁」てふ詞のあればなり。されど、桐壺こそことにわたりて聞ゆれ。

○惣て此物語は、紫式部の在し御時の様を書たるもの也。されど、前代の帝の御名をあげ、其外の人々の様をも今の一人にあたらぬやうにかきなしたるは、罪をのがれんとて也。さてこのほどは、帝の御いきほひややおとるへゆかせ給ひ、臣下の権のみつよれるをうれへて、ひそかに帝の御いきほひつよりまさんずる心がまへを書たりと見ゆ。そのよしは次々にいふべし。

〔玉〕源氏君生れ給へるより、十二歳元服の事まで見えたり。かくて卷の末に、「おとなになり給ひて後は云々」とあるを、花鳥余情に「此詞に、十三歳十四歳十五歳、三箇年の事をばこめて、帚木卷は、十六歳也」とあり。今思ふに、しからず。おとなになり給ふとは、元服しておとなの形になり給へるよしなり。これに三年こもりとはいふべからず。なほ下の文に、「ただいまは、をさなき御ほどに、つみなくおぼしなして云々」とあるにてしるべし。されば此卷は十二歳までにて、帚木へ年立はつづかざるなり。伊勢物語に、「むかし男うひかうふりして」と書出せるも、業平朝臣の成人のはじめを先いひおきて、さて奈良へ下られたるは、其

後いつにても有べきごとく、此物語も、此卷にまづ元服までを書おきて、さて年立は帚木よりつづけたる也。桐壺卷は序文までもいりたらずといへる説、いはれたる事なり。

〔初〕この桐壺の一巻は、源氏君の本伝なり。されば初に御父帝の御母更衣を寵し給ふ事より、源氏君の生れ給へる事を挙、さて末に御元服ありて、源の氏を賜ひて御臣の列にいり給へること、又當時の左大臣殿の婿になりて、その里亭にすみ給ふよしまでを挙たる也。故、帚木より次下なる巻々とは年立もつづかず、ただ此卷のみもてはなれたるなれば、さるころして読べし。

〔評〕此物語の筆づかひのいみじきことは、いふもさらなれど、此卷は初の巻なればにや、ことにいみじき所々おほし。先最初に帝の更衣を寵し給ふ事の甚しきよしをいひおこして、次々に人のそしり恨のおこるさまをいひ、さてそのうらみねたみの故によりて竟に更衣は病となりてうせ給へるよしをいへるは、或人もいへることく、源氏君の孤となり給へる事をいひて、見ん人のあはれの深くかかるべき程としたるなるべし。さて其次に更衣の身まかられたるを、帝のふかくをしみ歎かせ給ひて、更衣の母北方のかたへ鞆負の命婦をつかはされたる所、又命婦がかへり参りたるところの一段は、殊に語をえりととのへて、文づらはなやかに、心をかなく書なされたり。その中に、をりからのけしきをかかれたるなどはさらにいとめでたきに、其法おそかにみだれずして、かなしびをそふるひびきとなれるさま、かけても及ばぬ筆つきといふべし。さてそこまでは、上に「楊貴妃のためし」と書出られたるより、白氏文集なる長恨歌をしたにほはせてかかれたるに、その脈つゆもみだれず。かつ彼にはよりながらいづこもいづこも其語の意をとりかへて、新らしくめづらしく書なされたるなど、巻々の引歌の法と同くして文章の余韻と

なりたる、えもいはれずめでたし。さて末にいたりて、源氏君の伝にうつり、その容貌と才芸とのいみじくめでたきよしをいふ中に、高麗の相人に見せ給へることをいひて、一世のほどにあるべき事を先いはせたるなど、ぬけ出たる書さまといふべし。これなん一部のおもふきを思ひ構へられたることのはじめなりける。さて其後元服し給ひて、其夜左大臣殿のむこに成給へる事をいへるは、やうやうおとなになり給へることをしらせたるにて、此卷の事のすぢここに終れり。さる中に、藤壺中宮の伝、左右大臣の伝、弘徽殿女御の事、東宮の御事、頭中将、葵上の事など挿みあらはして、末の巻々の源因とせられたるなど、いともいと透間なきもの也。おほかた卷中の人々の事は、源氏君の御族の一同も藤壺中宮の一同も左大臣頭中将の一同も右大臣弘徽殿女御の一同にて、其余の人々は皆それに属たるがとき人々也。さればそのむねとあるかぎりをばみな此卷に引出て、末の巻の基とせられたる法、いとおごそかにめでたし。さて巻末にいたりて、ふたたび光る君といふ名の事をいひてとぢめられたるにて、この巻は此君の本伝をむねとかかれたることもおのづからあらはれて、かぎりなくあぢはひふかし。大かたかかることは、先達もをりをり注せられたることあれど、さしも委しくははれたるもなければ、をこがましけれど、さし出て評ずる也。見ん人、意の過たるを思ひゆるしてよ。

●本文と注釈の部の翻刻に当たっては、

- ・ 本文に、頭注があることを示す「\*」、語釈があることを示す「◆」を新たに付した。
- ・ 頭注スペースを広めに取り、そのページの頭注がその該当本文を含む見開き内にできるだけ収まるようにした。
- ・ 頭注は、濁点は付いているが、句読点・括弧類がほとんど付いていないので、適宜それらを補った。

いづれのおほん時にか

〔玉〕此物語は、すべて作り物語にて、今世にいはゆる昔ばなし也。さる故に、昔いづれの御時にかありけん、かかる事の有し、といへるにて、此詞一部にわたり云々。

女御更衣

〔花〕女御は、后につげる女官也。更衣は、女御よりは次の人也云々。

いとやんことなききははあらぬが

〔釈〕或説に、「源氏君は、よきことをつくしてかけるなれば、御母も大臣家の女などにつくりなすべきを、やんことなききはならぬとあるは、しばらくおさへて、見る人にあはれと思はせんとて也。末に帝のわたくし物にかしづき給ふなどある、皆其意也」といへり。此説しかるべし。ときめき給ふありけり

〔評〕「時めき給ふ更衣ありけり」などはかかずして、「それより下らうの更衣たちは」といふ所にて、更衣と知らしめたる、いみじき筆づかひといふべし。かやうのこと次々にいと多し。心得おくべし。はじめより

〔玉〕「もとより」といはんがごとし。

うらみをおふつもりにや

〔釈〕人の恨の我身にかかる事を、物を引負ふになぞらへて負といへる也。さて恨をおひてとやかくや心を苦しめたるが積りて、竟に病がちになり給へる意なり。

さどがち

〔新〕さとにすみがち也。

いよいよあかず云々

〔評〕人の妬むによりて里にすみがちなれば、逢給ふこと遠くして、いよいよ飽すあはれにおぼえ給ひつつ、竟には人のそしりをもえ憚らせ給はぬ也。げに人情はさるものになんありける。此脈次々にますます甚しくなりもてゆくさま、よくよく心をつけて味はふべし。

世のためしにもなりぬべき

〔新〕末に楊貴妃にたとへんの本也。

めをそばめつつ

〔新〕あしくきははしき物を見る時のさま也。長恨歌伝に「京師長吏為是側目」といふにもよりしならん。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとや

んことなききははあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。は

じめよりわれはと思ひあがり給へる御かたがた、めざましきものに

おとしめそねみ給ふ。おなじほど、それより下らうの更衣たちは、

ましてやすからず。あさゆふの宮づかへにつけても、人の心をのみ

うごかし、うらみをおふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆ

き、もの心ほそげにさどがちなるを、いよいよあかずあはれなるも

のにおもほして、人のそしりをもえはばからせ給はず、世のためし

にもなりぬべき、御もてなしなり。かんだちめうへ人なども、あい

なくめをそばめつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしに

やうあめのしたにもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊

も、かかることのおこりにこそ、世もみだれあしかりけれ、とやう

ほかれど、かたじけなき御心ばへの、たぐひなきをたのみにてまじ

らひ給ふ。ちちの大納言はなくなりて、はは北の方なんいにしへの

人のよしあるにて、おやうちぐし、さしあたりてよのおぼえはなや

かなる御かたがたにもおとらず、何事のきしきをも、もてなし給ひ

けれど、とりたててはかばかしき、御うしろみしなければ、ことと

ある時は、なほより所なく心ほそげなり。さきの世にも御ちぎりや

ふかかりけん、よになくきよらなる、たまのをのこみこさへうまれ

意にていへる也。

御契やふかかりけん云々

〔釈〕帝と更衣と、前世の御宿縁やふかかりけん、清らかなる御子を生給ふ」といふ意也。「さへ」といへるは、男御子なる故に殊にめでたき

意にていへる也。

いつしかと云々

〔釈〕御産は更衣の御さにてあるなれば、帝の何時歟生れ給ふとやうに心もとなく待遠におぼしめしたる故に、急ぎまゐらせて御覧するなり。

一のみこは云々

〔釈〕帝の第一の御子也。後に朱雀院と見えたる御事也。右大臣の女御は右大臣の女の女御といふ意也。卷中弘徽殿とある御方なり。

〔評〕主客の法を設けて初て朱雀院の御事を書出せり。これやがて源氏君の方と弘徽殿の方と反対して御中よからぬ事を語る最初の筆なり。さて一のみこの御勢ひのいみじきことを揚ひひて、却てそれにもまさる若宮の御寵愛の甚しき事をいへる抑揚、いとめでたし。

まうけの君

〔釈〕春宮の御事なり。

御にほひには

〔釈〕にほひは容貌のうつくしくめでたきをさしていへる也。

わたくしものに

〔釈〕「帝の私物として格外にかしづき給ふ」といふ意なり。下に見えたる御着袴御元服の式などの、よのつねに越たるさまなど、皆私物のうち也。心をつくべし。「かしづき」は、尊ふかたより転りていたはるにもいへり。

母君

〔釈〕一本によりて補ふ。此詞なき本はわろし。小櫛の説也。

おしなべての上宮つかへ

〔細〕女御更衣は別殿に伺候して時々こそさふらふべきを、此人は典侍などのやうに御前さらずめしまとはせは、かへりてかるがるしきなり。

〔花〕すけ内侍などのごとく朝夕に御前にしこうするを上宮仕へといへり。

〔評〕此段立かへりて更衣の御寵愛のさまをいひて、さて若宮をうみ奉給へる後の事に及べり。

上ずめかしけれど

〔新〕今昔物語の古本に、貴人を上衆とかき、下賤をば下衆と書り。時の俗語也。

〔釈〕今俗にも「上しう」などいふ也。さて上衆めきてはあれど、軽きかたに見えしとつづく意の文中に、其軽く見ゆるゆゑを挿みてことわる也。此法卷中に多し。

まつはさせ

〔釈〕糸の物に纏はるることく、御側に引つけて放ち給はぬ意也。

まうのぼらせ給ふ

〔玉補〕森嘉基云、「給ふ」は「給ひ」と有しを誤れるなるべし。

おほとのごもり過して

〔湖師〕長恨歌に「春宵苦短日高起」とある心なり。

やがてさふらはせ給ひ

〔玉〕更衣を局へ退らしめず、翌日もそのまま御前にさふらはしめ給ふ也。

いと心ごとく

〔釈〕若宮生れ給ひてよりは、更衣をも格別に思しめす也。

坊にも

〔孟〕東宮坊 職員名

〔釈〕天位を嗣給ふべき皇太子のおはします宮を東宮坊といふ。

一のみこの女御

〔釈〕一の御子の御母、女御といふを省きていへるなり。すなはち弘徽殿の女御なり。

人よりさきに参り給ひて

〔湖〕弘徽殿女御は、余の女御更衣よりさきに入内ありて、朱雀院一品宮前齋宮などの御母なれば、帝の御思ひやんことなかりしなり。

〔評〕「坊にもようせずは」といふより下、源氏君の方と御中のよかるまじき事のよしをいへるついでに、帝も弘徽殿をは憚らせ給へる事を奉て、弘徽殿がたの御威勢の争ひがたきさまをあらはせり。此脈やうやうにすすみゆく文勢に心を付べし。

きずをもとめ

〔釈〕きずはあやまち也。漢書の「吹毛求疵」といふ語に依てかくかかれたるなるべきこと、旧注のごとくなるべし。あやまちを求め出して恥をあたへんとする意なり。

〔評〕此段 恨をおふ事のますます深くなりゆきて、つひにうせ給ふべき筆のすぢを、いよいよすすめてゆくなり。なかなかなる物思ひをぞし給ふ

〔細〕此物語なかなかといふ詞いづくも妙なり云々。御寵愛なくばかやうにはあるまじきを、これゆゑに中々なる物思ひもあるとなり。

給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、いそぎまゐらせて御覧

マチドホガラセ

ずるに、めづらかなるちこの御かたちなり。(一)のみこは、右大臣

珍奇

乳児

容貌

御子

の女御の御はらにて、よせおもく、うたがひなきまうけの君、と世

腹

オモヒナシオモク

備

にもてかしづき聞ゆれど、この御にほひには、ならび給ふべくもあ

アガメ

御子ノ艶

並

らざりければ、おほかたのやんことなき御おもひにて、この君をば

ヒトトホリ

タイセツナ

わたくしものにおもほしかしづき給ふ事かぎりなし◎母君はじめよ

私

イタハリ

際限

最初

り、おしなべてのうへみやづかへし給ふべききはあらざりき。

ツウレイ

上宮仕

分限

おぼえいとやむことなく、上ずめかしけれど、わりなくまつはさせ

人オモハク

タフトク

衆

中ムシヤウニ

繼

給ふあまりに、さるべき御あそびのりをり、なに事にもゆゑある

然

遊興

シサイ

ことのおしづしには、まづまうのぼらせ給ふ。ある時はおほとのご

節々

一ハニニ

参上

御疑なる事也

大殿

もりすぐして、やがてさふらはせ給ひなど、あながちにおまへさら

隠一過

ソノママ

伺候

メツタムシヨウ

御前

去

ず、もてなさせ給ひしほどに、おのづからかるきかたにも見えしを、

トリアツカヒ

自然

△位ヨリハ

この御子生れ給ひてのちは、いと心ごとくに、おもほしおきてたれば、

疑

別

疑

坊にも、ようせずは、このみこのぬ給ふべきなめり、と一のみこの

疑

屈

参

女御は、おぼしうたがへり◎人よりさきにまゐり給ひて、やんこと

疑

先

参

なき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御か

△帝ノ

ヒトトホリ

たの御いさめをのみぞ、なほわづらはしく、心ぐるしう思ひ聞えさ

リンキ

メンダウシウ

キノドクニ

せ給ひける◎かしこき御かげをば、たのみきこえながら、おとしめ、

△こより又更衣のうへ也

アリガタイ

陰

憑

アナツリ

きずをもとめ給ふ人はおほく、我身はかよわく、ものはかなきあり

疑

求

コキ殿ナド也

弱

ラチノアカヌ

さまにて、なかなかなるもの思ひをぞし給ふ◎御つぼねはきりつぼ

ナマナカ

イ御つしは

桐壺

爾雅積宮云宮中術謂之壺。郭注。巷閭間道云云。

御つほねはきりつほなり

〔釈〕帝のおはします清涼殿の丑寅の方にある淑景舎を桐壺といふ。御つほに桐を植られたりとぞ。そこに更衣の御局はあるなり。

〔評〕殊更に御座所より遠き桐つほをとり出たるは、あまたの御方々の恨をかきねんとての結構なるべし。作者の用意いとこまやかに巧なり。あまたの御かたがたを

〔花〕弘徽殿・麗景殿・宣耀殿などを過てゆく馬道つづきなれば、あまたの御かたがたを過させ給ふとはいへり。

〔釈〕あまたの御かたがたの前を、更衣のわたりて清涼殿へ上り給ふをいふ。旧説はひがことなり。

けにことわりと見えたり

〔評〕この語は作者の自評なり。更衣の時めき給ふさまを強く聞せたる筆づかひ、いといみじ。

うちはし

〔細〕きり馬道に板を打わたしてかよふみち也。

わたごの

〔釈〕彼此の殿の間に打わたして建たるを渡殿といふ。今世につり屋といふ物のごとし。

あやしきわざをしつつ

〔湖〕けがらはしき物をまきちらして、更衣をおくりむかへの女房のきぬのすそをよごししなるべし。

めだうの戸をさしこめ

〔新〕和名抄に「弁色立成云、馬道俗名米多字向堂之道也」と書り。ここは外へよきさくるかたなき馬道なり。さてその馬道の所々をさへきる妻戸を閉て、かなたにてもこなたにても心得てひらかぬ也云々。

はしたなめ

〔玉〕はしたなからしむるにて、更衣を迷惑せしむるをいふ。

後涼殿

〔花〕御殿の西にあたる殿なれば、常の御所にちかき也。俊成卿云、こうらうでんとよむべし。仮字がきの物を正字のごとくよめばこははしき也云々。

うへつほね

〔玉〕つねの局の外に、御座所ちかきあたりに別に休息所にまうけたる局なり。

そのうらみましてやらんかたなし

〔釈〕「やらんかたなし」は、はらし遣る所なき意にて、皆更衣の身に負ひ給ふと云ふこと也。

〔評〕此段、更衣の思ひわびたるを御覧じて、いとど御あはれのかかりゆく情、げにさも有べき也。かくて恨をおふ事一段ふかくなりたり。

一のみやの奉りしにおとらず

〔釈〕一宮の御着袴の奉りしに劣すといふ意也。「の」もじいとめづらし。さてこれは非例のことなれど、御おぼえの殊なるがゆゑにかくは有にて、前に「私物に」とありし脈なり。

くらづかささめどの

〔釈〕内蔵寮納殿也。共に御宝物など納めおかるるところなり。

えそねみあへ給はず

〔釈〕更衣を憎しと思ふ御かたがたも、若宮をばしひて得嫉みあへ給はずと也。あへは強てすることにて、敢字の意也。「あへず」はその反にて、不<sub>レ</sub>敢なり。

物の心しり給ふ人は

〔釈〕御かたがたの中にも、物事の情をよく思ひわきて知給ふ人は、却て賞歎き給ふとの意也。「なりけり」は深く歎息したる辞なり。さてかくいふは、源氏君のかたちも心もすぐれてめでたきよしを語り出るにて、仇なふ人もめで奉るとまでいへるなり。猶下にもあり。上に「玉の男御子」と書出たる脈也。心得おくべし。

その年の夏

〔評〕上の段に恨みのつもりたる事をいひ置て、ここに至りて竟に病を引出給へるさまにかきなされたり。是より下は、帝の御寵愛の進みゆく方を主とあらはしたり。

みやす所

〔玉〕此物語の例をもて考るに、細流にも注せられたる如く、御子をうみ奉り給へば御息所と申せり。さてそは、女御更衣などの外に別に此所あるにはあらず、女御更衣などにわたれり云々。

なり。あまたの御かたがたをすざさせ給ひつつ、ひまなき御まへ前なり。数多

たりに、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり。まう余ノ女御更衣タチ也 尽 ナルホド モットモ ダウリ

のぼり給ふにも、あまり打しきるをりをりは、うちはしわた殿、こ上

こかしこのみちに、あやしきわざをしつつ、御おくりむかへの人の、ケシカラヌ キクワイナ 送 迎

きぬのすそたへがたう、まさなき事どもあり。又ある時は、えさらキヌハ ムホウナ ノガレガ

ぬめだうのとをさしこめ、こなたかなた、心をあはせてはしたなめヌメダウ 戸 鎖 籠 此方 彼方 イ チ メ

わづらはせ給ふ時もおほかり。事にふれて、かずしらず、くるしきワヅラハセ 多 有 触 数

ことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御コト バカリ ズツ ヒドウ コマリ ヒトシホ フ ピン

らんじて、後涼殿に、もとよりさぶらひ給ふ更衣のさうしを、ほかラン コウラウデン ハジメ 侍 曹 子 ヘ ヤ 他

にうつさせ給ひて、うへつほねにたまはず。そのうらみましてやらニウツ 移 ウヘツ ソレヲ コノ 更衣 賜 遣

んかたなし「このみこみつになり給ふ年、御はかまぎの事、一の宮ン カ タ ナ シ 方 源氏君三歳 着 袴 儀式也

の奉りしにおとらず、くらづかさ、をさめどのの、ものをつくして、ノ 奉 リ シ ニ オ ト ラ ズ 劣 ク ラ ヅ カ サ 物 尽

いみじうせさせ給ふ。それにつけても、世のそしりのみおほかれど、イ ミ ジ ウ セ サ セ リ 講 諭

このみこのおよずけもておはする、御かたち心ばへ、ありがたくめコ ノ ミ コ ノ オ ヨ ズ ケ モ テ オ ハ ス ル チ 心 バ ヘ ア リ ガ タ ク メ チ エ ツ キ キ ミ ハ 三

づらしきまで見え給ふを、えそねみあへ給はず。ものこのころしりヅ ラ シ キ マ デ 見 エ 給 フ を 得 嫉 オ フ セ 物 珍

給ふ人は、かかる人も世にいでおはするものなりけり、とあさまし給 フ 人 ハ カ カ ル 人 モ 世 ニ イ デ オ ハ ス ル 物 ナ リ ケ リ ト ア サ マ シ カ ヤ ウ ナ カ イ ナ ア サ テ サ シ キ モ ノ ツ

きまで、めをおどろかし給ふ「そのとしの夏、みやす所はかなきこキ マ デ メ を オ ド ロ カ シ 給 フ ソ ノ ト シ ノ 夏 御 息 ツ イ チ ヨ ツ ト シ タ

ここにわづらひて、まかでなんとし給ふを、いとまさらにゆるさせコ チ ニ ワ ヅ ラ ヒ テ マ カ デ ナ ン ト シ 給 フ を 退 出 と マ サ ラ ニ ユ ル サ セ 煩

給はず。としごろつねのあつしきになり給へれば、御めなれて、猶給 ハ ズ ト シ ゴ ロ ツ ツ ネ ノ ア ツ シ キ ニ ナ リ 給 ヘ レ バ 御 め な れ て 猶 年 來 フ ダ ン ビ ヤ ウ ニ ン 成 目 馴 マ ダ

しばしころみよ、とのみのたまはするに、日々におもり給ひて、シ バ シ コ ロ ミ ヨ と ノ ミ ノ タ マ ハ ス ル ニ 日 々 ニ オ モ リ 給 ヒ テ モ ス コ シ 退 出 セ ズ ニ バ カ リ 一 日 々 ト 重

まかでさせ奉り給ふ

〔新〕落着をまついひて、其事のさまを次々にしるす文の一つなり。

あるまじきはぢもこそ

〔湖〕あまた妬む人あればなり。

みこをばごめ奉りて

〔玉〕源氏君もともに退出給はんには、人のよくしるべき故に、ひそかに

人のしるまじきさまにて、更衣のみ退出なり。そは、人のひろく知ては、

ねためる人々のしわざにて、恥がましき事などもあらんかとて也。

かぎりあれば

〔湖〕別ををしませ給ふも、その限りあれば也。

いとにほひやかに云々

〔新〕こは御息所の御ありさまをいとよく書とりたり。

あはれと物を思ひしみながら

〔新〕今はかぎりと思へば、御なごりをも御子の御事をも、思ひしみて奏

しおくべき事多かるべき也。

あるかなきかにきえ入つつ

〔新〕氣息のあるかなきかに消かへりておはするさま也。氣息と云ずして

それと聞きむるは、文詞をいやくせじとてのわざなるべし。

きしかたゆく未おほしわかれず

〔新〕俗言に、跡先の分別もなくといふ意也。いたく惑ひ給ふさま也。

いかさまにかと

〔玉〕俗言に「これは何とせうぞ」といふ意也。「まどはる」といへるにて

てぐるまのせんじ

〔河〕てぐるまは、石階いしの高き門よりのぼる中の重を出入のため也。中重

の輦車とも云也。

〔和秘〕輿こしに輪をかけて手してひく車をいふ也。内裏の門の内などをのる

也。更衣重病なれば、輦こしにのりて退出あるべきよしを仰らるる宣旨也

又いらせ給ひては

〔湖〕更衣の局へ帝入らせ給ひて、御覽じては猶別れがたく思しめす也。

さりとも打すてては

〔新〕さりともは然有とも也。病をさして然とはのたまへる也。

〔玉〕ゆくは、死てゆく也。上の語、次の歌にて知るべし。

〔評〕この御詞いといとせちにあはれにて、鬼神もおしのごひつべくなん。

かぎりとて云々

〔新〕右のかぎりあらん道にも云々といふをうけて、さは契り奉りしかど、

命はおのおのかぎり有て別れ奉るがかなしきといひ、さて云々、とて

もかくてもいきたきものは命にてこそあれと也。

〔玉〕拾遺にいへるごとく、生に行をかねたり。但し、行のかたは、ただ

わかるる道といへる縁のみにて、歌の意は生なり。

いきもたえつつ云々

〔新〕息もたえつつは、絶つ絶つして未絶ざる意なれば、たえだえてと

いはんがごとし。

〔評〕「いとかく思給へましかば」といふ下に、「奏しおくべき事は多かり

しを」と後悔の意を含めたるにて、かぎりもなくあはれに聞えたり。又

「聞えまほしげ」「ありげ」「くるしげ」「たゆげ」など、殊更に四つのけ

もじを重ねたるは、皆他より推量りたる更衣のありさまなれば也。いと

いとくはしくめでたしといふべし。

けふはじむべきいのりども

〔評〕いのりの事にて、限りなき御別れのわりなきを立きりたる書ざま、

いとくはしくあざやかなり。

桐壺

ただ五六日のほどに、いとよわうなれば、ははきみなくなくそうし

て、まかでさせ奉り給ふ。

かかるをりにも、あるまじきはぢもこそ、

と心づかひして、みこをばごめ奉りて、

しのびてぞ出給ふ。かぎ

りあれば、そのみもえとどめさせ給はず。

御覽じだにおくらぬおぼ

つかなさを、いふかたなくおぼさる。

いとにほひやかに、うつくし

げなる人の、いたうおもやせて、いとあはれと物を思ひしみながら、

ことにいでも聞えやらず、あるかなきかにきえいりつつものし給

ふを御覽するに、きしかたゆくすゑおほしめされず、よろづの事を、

なくなく契りのたまはずれど、御いらへもえ聞え給はず。まみなど

もいとたゆげにて、いどどなよなよと、われかのけしきにてふした

ダルサウ ヒトシホ グニヤグニヤ

どの給はせても、又いらせ給ひては、さらにえゆるさせ給はず。か

ぎりあらんみちにも、おくれさきだたじ、とちぎらせ給ひけるを、

さりともうちすててはえゆきやらじ、との給はするを、女もいとい

みじと見たてまつりて、

いとかく思ひ給へましかば、といきもたえつつ、きこえまほし

げなることは、ありげなれど、いとくるしげに、たゆげなれば、か

くながらともかくもならんを、御覽じはてむ、とおぼしめすに、け

ふはじむべきいのりども、さるべき人々うけたまはれる、こよひよ

桐壺

ただ五六日のほどに、いとよわうなれば、ははきみなくなくそうし

て、まかでさせ奉り給ふ。

かかるをりにも、あるまじきはぢもこそ、

と心づかひして、みこをばごめ奉りて、

しのびてぞ出給ふ。かぎ

りあれば、そのみもえとどめさせ給はず。

御覽じだにおくらぬおぼ

つかなさを、いふかたなくおぼさる。

いとにほひやかに、うつくし

げなる人の、いたうおもやせて、いとあはれと物を思ひしみながら、

ことにいでも聞えやらず、あるかなきかにきえいりつつものし給

ふを御覽するに、きしかたゆくすゑおほしめされず、よろづの事を、

なくなく契りのたまはずれど、御いらへもえ聞え給はず。まみなど

もいとたゆげにて、いどどなよなよと、われかのけしきにてふした

ダルサウ ヒトシホ グニヤグニヤ

どの給はせても、又いらせ給ひては、さらにえゆるさせ給はず。か

ぎりあらんみちにも、おくれさきだたじ、とちぎらせ給ひけるを、

さりともうちすててはえゆきやらじ、との給はするを、女もいとい

みじと見たてまつりて、

いとかく思ひ給へましかば、といきもたえつつ、きこえまほし

げなることは、ありげなれど、いとくるしげに、たゆげなれば、か

くながらともかくもならんを、御覽じはてむ、とおぼしめすに、け

ふはじむべきいのりども、さるべき人々うけたまはれる、こよひよ

桐壺

ただ五六日のほどに、いとよわうなれば、ははきみなくなくそうし

て、まかでさせ奉り給ふ。

かかるをりにも、あるまじきはぢもこそ、

と心づかひして、みこをばごめ奉りて、

しのびてぞ出給ふ。かぎ

りあれば、そのみもえとどめさせ給はず。

御覽じだにおくらぬおぼ

つかなさを、いふかたなくおぼさる。

いとにほひやかに、うつくし

げなる人の、いたうおもやせて、いとあはれと物を思ひしみながら、

ことにいでも聞えやらず、あるかなきかにきえいりつつものし給

ふを御覽するに、きしかたゆくすゑおほしめされず、よろづの事を、

なくなく契りのたまはずれど、御いらへもえ聞え給はず。まみなど

もいとたゆげにて、いどどなよなよと、われかのけしきにてふした

ダルサウ ヒトシホ グニヤグニヤ

どの給はせても、又いらせ給ひては、さらにえゆるさせ給はず。か

ぎりあらんみちにも、おくれさきだたじ、とちぎらせ給ひけるを、

さりともうちすててはえゆきやらじ、との給はするを、女もいとい

みじと見たてまつりて、

いとかく思ひ給へましかば、といきもたえつつ、きこえまほし

げなることは、ありげなれど、いとくるしげに、たゆげなれば、か

くながらともかくもならんを、御覽じはてむ、とおぼしめすに、け

ふはじむべきいのりども、さるべき人々うけたまはれる、こよひよ

桐壺

ただ五六日のほどに、いとよわうなれば、ははきみなくなくそうし

て、まかでさせ奉り給ふ。

かかるをりにも、あるまじきはぢもこそ、

と心づかひして、みこをばごめ奉りて、

しのびてぞ出給ふ。かぎ

りあれば、そのみもえとどめさせ給はず。

御覽じだにおくらぬおぼ

つかなさを、いふかたなくおぼさる。

いとにほひやかに、うつくし

げなる人の、いたうおもやせて、いとあはれと物を思ひしみながら、

ことにいでも聞えやらず、あるかなきかにきえいりつつものし給

ふを御覽するに、きしかたゆくすゑおほしめされず、よろづの事を、

なくなく契りのたまはずれど、御いらへもえ聞え給はず。まみなど

もいとたゆげにて、いどどなよなよと、われかのけしきにてふした

ダルサウ ヒトシホ グニヤグニヤ

どの給はせても、又いらせ給ひては、さらにえゆるさせ給はず。か

ぎりあらんみちにも、おくれさきだたじ、とちぎらせ給ひけるを、

さりともうちすててはえゆきやらじ、との給はするを、女もいとい

みじと見たてまつりて、

いとかく思ひ給へましかば、といきもたえつつ、きこえまほし

げなることは、ありげなれど、いとくるしげに、たゆげなれば、か

くながらともかくもならんを、御覽じはてむ、とおぼしめすに、け

ふはじむべきいのりども、さるべき人々うけたまはれる、こよひよ

桐壺

ただ五六日のほどに、いとよわうなれば、ははきみなくなくそうし

て、まかでさせ奉り給ふ。

かかるをりにも、あるまじきはぢもこそ、

と心づかひして、みこをばごめ奉りて、

しのびてぞ出給ふ。かぎ

りあれば、そのみもえとどめさせ給はず。

御使のゆきかふ。  
拾新行帰なり。万葉に「往反」とかけり。

よなか打過るほどに  
玉これは、更衣の里の人々のいへる詞を、御使のききたるところをいふ也。

こもりおはします

抄夜の御殿などへ引こもり給へるなるべし。

みこはかくても

玉御母更衣はうせ給ひても、の意也。

例なき事なれば

細七歳已前の人服忌の事、醍醐の御代に法をたてらるる事、両度改れり。是は、はじめ七歳已前の人も服のいみあるべしと有し時の分にかける也。

あやしと見奉り給へるを

玉補「ここに脱あるべし」と故大人にさきに聞たるを、小櫛にはもらされたり。

釈をもじ、下に係る所なし。もしくは衍文か。

評この語かなしひの情を尽くしたり。打よむ者の腸を断るることちす。

よろしき事にだに云々

釈此所いたく紛らはしきを、諸注に何のさだまなきはいふかしき事也。まづ、「よろしき事にだに」は、新釈に「常ぎまの事にだに也」とある意にて、俗言に「相応な事でさへ」と云意なるべし。「かかるわかれ」とは、親子のわかれをいへりと聞ゆ。然らば、「よろしき事」といふは、生ての別をさしたるならん。さてすべての意は、「生たるうちによろしき事にてわかるるだに親子の別れのかなしからぬはなき事なるに、これはまして死別なれば、いともあはれにていふかひなし」といふ意なるべし。おなじけふりにも云々

釈当時の葬は、むねと火葬なりしからに「煙」といへる也。母北の方、「更衣と同く死ん」との給ふを、かくあやなしていへる也。

玉「これが」は、煙の縁の詞をもていへるにて、文のあや也。此類多し。心を付べし。

女房

釈房はつばねにて、今いふ部屋へやの事也。仕へする女の房むらの事より転りて、つかふる女をすべていふ称となれる也。今世女中衆といふがごとし。

愛宕といふ所

河桓武天皇、平安城に遷都の時、此地を諸人の葬所に定めらる。延暦遷都記に見えたり。

むなしき御からをみるみる

玉これはいまだ葬に出たたれざるさきにはれたりし語にて、「かねてはかくの給ひつれど」と也。

はひになり給はんを

釈火葬なればかくいへり。「同じ煙にも」とありし脈まなり。

りときこえいそがせば、わりなくおもほしながら、まかでさせ給ひ  
イテ 催 促 ナサケナイコトニ 退出

つ。御むねのみつとふたがりて、つゆまどろまれず、あかしかねさ  
胸 バカリ ヒシト 塞 チットモ ネムラレズ △ソノ夜ヲ

せ給ふ。御使のゆきかふほどもなきに、なほいふせさをかぎりなく  
往 反 シンキラシサ オボツカナサ

のたまはせつるを、夜中うちすすぐるほどになん、たえはて給ひぬる、  
絶 竟

とてなきさわげば、御つかひもいとあへなくてかへりまぬ。き  
泣 騒 ハリアヒナク 歸 参 △ソレヲ 帝ノ

こしめす御心まどひ、なに事もおぼしめしわかれず、こもりおはし  
分 籠

ます。みこは、かくてもいと御らんぜまほしけれど、かかるほどに  
コノママデモ ジラン

さぶらひ給ふれいなきことなれば、まかでたまひなんとす。なにこ  
若宮ノサマ也 △更衣ノ里へ

とかあらんともおもほしたらず、さぶらふ人々のなきまどひ、うへ  
テアラズ 侍 女房ヲチナド也 泣 惑 上

も御なみだのひまなくなれおはしますを、あやしと見奉り給へる  
フシギナ

を、よろしきことにだに、かかるわかれのかなしからぬはなきわざ  
サウオウナ デサヘ 別離 コト

なるを、ましてあはれにいふかひなし。かぎりあれば、れいのさほ  
ニ 例 作法 葬送ノ

うにをさめたてまつるを、はは北のかた、おなじけふりにものぼり  
式也 △屍ヲ 母 煙

なん、となきこがれ給ひて、御おくりの女房むらのくるまに、したひの  
御供シテ葬ヲ送ル女中也 車 慕 乗

り給ひて、をたぎといふ所に、いといかめしうそのさほうしたる  
愛宕 蔽 重 作法 為

に、おはしつきたるここに、いかばかりかはありけん。むなしき御  
着 草子地ニ評シテ云也 空

からをみるみる、猶おはする物とおもふが、いとかひなければ、は  
骸 ヤハリ△コノ世ニ モウイマハ △コノ世ニ ヒトスデニ 灰

ひになり給はんを見奉りて、今はなき人、とひたぶるに思ひなりな  
車

ん、とさかしうの給ひつれど、くるまよりおちぬべうまどひ給へ  
カシコウ

ば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひ聞ゆ。うちより御つかひ  
サウハオモウタコトヨ 御送ノ女房タチ 煩 内

三位のくらゐ

〔玉〕これは三位のくらゐと書たれば、三位は音にてさんゑと訓んぞ、物語の詞つきなりける。

宣命

〔積〕贈位の旨をかかれたる勅語のふみ也。

〔湖〕大臣勅を奉りて、内記に命じて作らしむるよし、延喜式に有。少納言これをよむと云々。

今一きざみの位

〔箋〕更衣は四位、女御は三位なり。

物思ひしり給ふは

〔積〕にくみ給ふ人々の中にも、物の情思ひしり給ふ人は、といふ意也。上に「物の心しり給ふ人は」とありしすぢにて、憎む人の中より賞る方の人をとり出たる文のあや也。

さまあしき

〔積〕きりつぽの更衣一人を寵し給ふ故に、他の女御更衣たちはおのづからすさめられたるを、様悪きといへる也。外見のわるき意也。

うへの女房

〔玉〕すべて「うへ」とは帝の御あたり近き事にいへり。「うへつぽね」「うへみやづかへ」などのごとし。これは帝の御前ちかくつかうまつる女房をいへり。

なくてぞとは

〔奥人〕ある時はありのすさびにくかりきなくてぞ人は恋しかりける

〔拾六帖第五物語〕ある時はありのすさびにかたはらで恋しき物とわかれてぞしる。この歌はありて奥入の歌なし。何に出たるにや。

〔釈案〕奥入の引歌は、げに疑はしきもの也。されども、六帖の歌をかへて引出べきにもあらず。別にさやうの歌ありしにこそ、よく尋ぬべし。されば、「かがるをりにや」とある下に含めたる意も、本歌のさまによりては聊たがふべし。かれ、試に△ヨミケン△アランと二やうに記しおきつ。

御かたがたの御とのゐ

〔積〕女御更衣たちの、帝へ御番に参り給ふ事也。

露けき秋なり

〔河〕後撰へはいさごとぞともなきながめにぞわれは露けき秋もしらるる

〔釈案〕、これは引歌にはあらず、類例のみ也。ただ、「傍にて見奉る人までも、帝の御心をおしはかり奉りて涙がち也」といふ意を「露けき」とはいへる也。さて、「秋なり」といふに時のおしうつりたることをおもはせたる筆のはたらき、さらにめでたし。

のわきたちて

〔余〕和名抄云、暴風史記云、暴風雷雨。漢語抄、八夜知又乃和木乃加世。

〔釈〕「野分」は秋の暴風を云。「たちて」は其風の吹立つ也。たをに「こりよみて」「野分めきて」とやうに説る注は、ひがこと也。さては、ふく風などの詞なくては聞えぬこと也。野分は、あながちに木を折、家を倒すばかりの大風をのみいふにはあらず、ただ強くふく風のことなれば、ここのけしきに論なし。

はださむき

〔拾〕万葉に膚の字をかきて「はだへさむし」とよめる歌おほし。

〔釈〕此説のごとく膚寒き也。將といふ説はわるし。野分の風吹立て、にはかに膚寒き夕ぐれ也。げに、いと人恋しくおもほし給ひけん事、うべなりともうべ也。

夕づくよのをかしきほどに

〔積〕夕月夜は、宵のほど、月夜にて暁の闇なる比を云。八月の十日ごろのさま也。

〔評〕御使を出し給ふほどに、暮はてて夕月夜となりたるさま、いとめでたし。この一段は、殊に詞をととのへてみやびかに書なされたり。次々心とどめて見るべし。

やがてながめおほします

〔評〕つねよりもおほし出る事多き故に、命婦を出し給ひても、猶そのままだに打ながめておほします也。余情思ひやり奉るべし。下の命婦がかへり参れる所と、相照してあぢはふべし。

かうやうのをりは

〔積〕夕月夜のをかしくあはれなるをり也。

あり。三位のくらゐおくり給ふよし、勅使きてその宣命よむなん、

かなしきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかづく

ちをしようおぼさるれば、いまひとときざみのくらゐをだに、とおくら

せ給ふなりけり。これにつけてもにくみ給ふ人々おほかり。物思ひ

しり給ふは、さまかたちなどの、めでたかりしこと、心ばせのなだ

らかにめやすく、にくみがたかりし事など、今ぞおほしいづる。さ

まあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみ給ひしか、人がらの

あはれになさけありし御心を、うへの女房なども、こひしのびあへ

り。なくてぞ、とはかがるをりにや、と見えたりはかなく日比す

ぎて、後のわざなどにも、こまかにとふらはせ給ふ。ほどふるまま

ば、見たてまつる人さへ露けき秋なり◎なきあとまで、人のむねあ

くまじかりける人の御おぼえかなとぞ、弘徽殿などには、なほゆる

しなうの給ひける◎一の宮を見奉らせ給ふにも、わか宮の御こひし

さのみ、おもほし出つつ、したしき女房、御めのとなどをつかはし

つつ、ありさまを聞しめす野分たちて、にはかにはださむき夕暮

のほど、つねよりもおほしいづる事おほくて、ゆげひの命婦といふ

をつかはす。夕月夜のをかしきほどに、いだしたてさせ給ひて、や

がてながめおほします。かうやうのをりは、御あそびなどをさせ給

遊

遊

遊

遊

やみのうつつには

〔奥入〕うば玉のやみのうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり  
〔細夢〕にいくらもまさらざりけりといひたるよりは、此條は猶はかなき  
と也。引歌のとりぎま奇妙なり。

門ひきいるるより

〔釈〕車を門より引入る也。車といはずして車と聞ゆるは、いひなれたる  
故にもあらんか。又心して省けるにも有べし。次々も皆しかり。

やみにくれて

〔余〕後撰雜一兼輔朝臣〔人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にま  
どひぬるかな

〔釈〕此歌の詞をにははせて書る也。更衣を想ひ給ふなげきにくれまどひ  
て、母君のふししづみ給へる間に也。

草もたかくなり

〔釈〕これはとりつくるはぬけしきを甚しくいへるまでにて、実に草の高  
くなれるにはあらず。かれ、「こちして」といへり。心をつくべし。

〔評〕上に「野分たちて」といひ、「夕月夜」といひ出たる脈をたがへず。

次々も皆風と月とを並べ、挙て時のけしきをかかれたる、いとおごそか  
に法あり。然るに、旧注に月の事をばいはれたれど、風のさだなきはい  
かにぞや。さて、ここには闇をもて月に反対し、草をもて風のけしきを  
そへられたる、殊にめでたきかきさま也。心をつくべし。

やへむぐらにもさはらず

〔奥入〕新勅〔どふ人もなき宿なれどくる春ややへむぐらにもさはらざりけ  
り 貫之

〔余〕此歌家集并六帖二の巻にも見えたり。

〔細〕春を月にかへて引用。

よもぎふ

〔釈〕はは君の卑下の詞なり。上の草・むぐらなどの縁なり。

げにえたふまじく

〔釈〕げに〔は、今までとまり侍るがいとうきを〕とあるをうけて「げに」  
といへる也。「えたふまじく」は、命もこらへがたきさまに見ゆるを云。

内侍のすけのそうし給ひしを

〔釈〕これよりさきに、典侍なる女房を御使に遣されし事ありしさまに書  
なしたる也。次の「げにこそ」といへるは、其典侍の奏したる語をうけ  
ていへるなり。

ややためらひて

〔釈〕「やや」は、暫時といはんがごとし。「ためらひ」は、猶予せる也。  
命婦の用意いみじく聞えたり。

しばしは夢かとのみ

〔釈〕更衣の身まかれしを、余りのかなしさに、暫くは夢かと思しめし  
たどられしと也。たどるは手取の意にて、物を搜り捜りするやうの事に  
いへり。ここは夢かと思ひさぐられ給ひし意也。

さむべきかたなく

〔新〕上に夢かとはかりとあるより出つ。

しのびては参り給ひなんや

〔湖〕母君に参内あれとなり。

露けき中に

〔釈〕涙がちなる夢の中に、といふ意なるを、折から秋なれば、かくの給  
へる也。

むせかへらせ給ひつつかつは人も云々

〔評〕御かなしみのありさまかき得ていといみじ。

ひしに、別 ころことなる物のねをかきならし、ナニトナウ はかなくきこえいづ

ることのはも、別 人よりはことなりしけはひかたちの、キマヘ おもかげにつ

とそひておぼさるるも、タト やみのうつつには、マダ なほおとりけり。劣

命婦かしこにまかンでつきて、着 かどひきいるるより、スマヒノクシキ也 けはひあはれな

り。寡 やもめずみなれど、更衣一人 人ひとりの御かしづきに、マカナヒ とかくつくるひ

たててめやすきほどにて、ミタルシカラヌクラキ すぐし給ひつるを、過 やみにくれて、ふし

しづみ給へるほどに、アヒダ くさもたかくなり、草高 野分◎にいとどあれたるこ

こちして、◎ 月かげばかりぞ、△ やへむぐらにもさはらずさしいりたる。隣

みなみおもてにおろして、南 はは君とみにえものもの給はず。今まで

とまり侍るが、憂 いとうきを、△アリガタキ かかる御つかひのよもぎふのつゆわけ

い給ふ。参 まぬりてはいとど心ぐるしう、ヒトシホ 心ぎももつくるやうに

なん、△オホユル と内侍◆のすけのそうし給ひしを、△只今参リテ見奉レ△ もの思ひ給へしらぬこち

にも、ナルホト げにこそいとしのびがたう侍りけれ、コラヘ とてややためらひて、猶

おほせごとつたへ聞ゆ。勅 しばしはゆめかとのみたどられしを、バカリ やう

やう思ひしづまるにしも、ダン さむべきかたなくたへがたきは、堪 いかに

すべきわざにかとも、コト とひあはずべき人だ+になきを、サヘ しのびてはま

あり給ひなんや。中へ わかみやのいとおぼつかなく、△月日ヲ 露けき中にすぐし

給ふも、キノドクニ 心ぐるしうおぼさるるを、疾 とくまぬり給へなど、シツカリ はかばか

しうものたまはせやらず。トモ むせかへらせ給ひつつ、ナガラ かつは人も心よ

いびが

うけ給はりもはてぬやうにて

**新**この心づかひ有べきことなり。

**評**「やうにて」とかける、更にめでたし。めも見え侍らぬに

**評**「見え侍らぬ」と有て、「光にて」とある事の情つらぬきて、縁の詞はなれず。いとめでたし。

**湖**勅定を光にて見るとの心なり。ほどへばすこし云々

**新**上の物語をむかへ見るに、事のこころ相はなれずして、又かさならぬやうに書なしたり。

もろともにはぐくまぬ

**玉**これは「もろともにはぐくまぬがおぼつかなきを」と有けんを誤れるなるべし。本のままにては穩ならず云々。さて、「もろともには」は、「更衣の母と諸共に」也。若宮里におはしまして、祖母一人してはぐくみて、帝のもろ共にはえはぐくみ給はぬよし也。「更衣と諸共に」といへる注はひがこと也。さては「おぼつかなき」といふ詞にかなはず。

むかしのかたみにならずらへて

**玉**「物し給へ」とは、母に「禁裡へまゐり給へ」とのたまへる也云々。「若宮を、我もそこ諸共にはぐくまぬがおぼつかなきほどに、今は若宮を更衣の形見ぞと思ひて、具し奉りて参り給へ、われもそこもろともにはぐくまん」となり云々。

みやぎのの云々

**玉**拾遺に、類歌を証に引て、宮城野を、「宮中にかくるまでは有まじきか」といへれど、猶宮中の心有べし。東屋巻に、「宮ぎの小萩が本としらませば」といふ歌も、宮城野とは八宮の事にいへるたぐひ也。花鳥に、「露吹き結ぶ」を「涙」とあるはわろし。

**釈**案に、「露吹きむすぶ」は、猶涙を催す意あるべし。さらでは、露は用なく聞ゆ。風は今日の野分の風也。「つねよりもおぼし出ることおほ

くて」といへる首尾なり。よく味はふべし。宮城野は陸奥の名所也。「こはぎ」は「木萩」なるを、「小萩」にとりなして児の縁にかけたる也。一首の意は、野分たちて、禁中にもそぞろに涙のもよほさるるにつけて、若宮の御うへをいかにと思ひやり給ふ、と也。露は風のふくにつけてよりあひて玉なすを、「吹結ぶ」とはいへる也。

松のおもはん事だに

**細**いかにしてありとしられし高砂の松の思はんこともはづかし六帖五**釈**いのちつれなくながらへて、高砂の松とひとしく人にしられんもはづかし、との意なるべし。新釈に説あり。別に記す。

もしき

**釈**もしきは大宮の枕詞なるを、やがて大宮の事にしていへる也。奈良をあをによし、山をあし引といへるたぐひの例なり。

宮は大どのごもりにけり

**玉**これより命婦が詞也。地よりいふにはあらず。さて此「けり」は、おしはかりて定めたる言也。

まぢおはしますらんを

**釈**このを、いかがしきやうなれど、後世ににといふべき意のをにて、例多し。誤にはあらず。くれまごふ心のやみも

**釈**くれまごふ心の昏くなりて惑ふ也。闇の縁に、まづかくいへり。人のおやの心はやみにあらねども云々の歌をおもへる事は勿論なり。但し、引歌にはあらず。

わく見奉るらん、とおぼしつつまぬにしもあらぬ御けしきの、心ヒナクぐオキ

るしさに、うけ給はりもはてぬやうにてなん、まかで侍りぬる、とノドクサ 退出

て御文たてまつる。めも見え侍らぬに、かくかしこきおほせご勅書也 アリガタキ 勅 命

ひかりにてなん、とて見給ふ。ほどへば、すこしうちまぎるる事もや、光 △見奉ル 勅書ノ文 間 経 少 △ア

とまちすぐす月日にそへて、いとしのびがたきは、わりなきわざラン 待 過 添 コラハ ダウリナキ ナサケナキ

なん、いはけなき人もいかに、と思ひやりつつ、もろともにはぐくイトギ △アル 幼 若宮也 ナカラ 諸 共 育

まぬおぼつかなきさを、いまは猶むかしのかたみになぞらへて、ものヤハリ 形見 准 マキ

し給へなど、こまやかにかせ給へり。委 書

みやぎの露ふきむすぶ風のおとにこ萩がもとを思ひこそやれ。母君 詞 命 長 ツレナウ

とあれど、え見給ひはてず。いのちながさの、いとつらう思ひ給へ俄ニ胸塞リテ見サシ玉 竟 ヘル体也

しらるるに、松のおもはんことだに、はづかしう思ひ給へ侍れば、知 サハモ 慚 愧

もしきにゆきかひ侍らんことは、ましていとはばかりおほくなん。禁 中 往 反 懼 多

かしこきおほせご抄前に御使ありし事聞えたり 命 度 々 自 身 △参内

なん思ひ給へたつまじき。わか宮は、いかにおもほししるにか、まヲ 下ノキウニ 知 △アラン

あり給はんことをのみなん、おぼしいそぐめれば、ことわり急 ゴモットモ 悲

しう見奉り侍るなど、うちうちおもひ給ふるさまを、そうし給へ。イニ 奏

ゆゆしき身に侍れば、かくておはしますも、いまいまいかたじけイマイマンキ △若宮ノ此所ニ エンギガワルウ モツタイナ

なくなどの給ふ。宮はおほとのごもりにけり。見たてまつりて、くイ 大 殿 籠 △ナ 委

はしく御有さまもそうし侍らまほしきを、まぢおはしますらんを、△帝ノ 二

夜ふけ侍りぬべし、とていそぐ。くれまごふ心のやみも、たへがた急 昏 惑 開 堪

かたはし

〔**釈**〕堪がたき悲みの端なども、このころ也。はるく

〔**新**〕「晴かす」を約めていへり。わたくしにも

〔**釈**〕此度はおほやけ事のついでなれば、「私にも」といへる也。まかで給へ

〔**釈**〕「退出てこなたへ來給へ」といふ意也。おもたしき

〔**新**〕「面起しき」にて、「面おこす」といふに同じ。かへすがへす

〔**抄**〕上の詞に、「命長さのいとつらう」、又其前に、「今までとまり侍るが」とあり。これらにて見れば、「返々つれなき」といへる尤味あり。生れし時より云々

〔**評**〕上に、「父の大納言はなくなりて」と何げなき語の中に、更衣の種姓をかたり出おきて、ここに至りて、其委き由を著はしたり。それはた殊更には説ずして、母君の語の中に挿みたる、いともいともめでたし。さて、「思ふ心ありし」とは、更衣の宮仕して、もしくは帝の御寵をかうぶり、若宮など生れ給はば、いみじき家の栄えともなるべく思ひおきてられたる意にて、当時の風俗すべてさやうなりし也。心あらん人は、心どごめて見るべし。さて又、上に「夜ふけ侍りぬべし、とていそぐ」といひおきて、又かくながながしき物語を説出たるは、このほどにますます夜の更ぬへき種子としたる文のたくみ也。

宮つかへのほい

〔**釈**〕上に「思ふ心ありし」といへる、即この本意の事也。

くつぼる

〔**余**〕契沖云、くづれ折る也。或云、万葉に「可多知久都保里」とあれば、折る義にはあらざるべし。

〔**釈**〕ただ顔る義なり。さてここは志の顔るる事にて、今俗もいふ語也。「なは」は「莫」也。

うしろみ思ふ人なき

〔**釈**〕この「うしろみ」は、用言なり。はかばかしくうしろみ助くる人なくて、宮つかへに出、人にまじらへば、人わろき事のみ多くして、出たらぬよ

りはおどるべき事を、「なかなか」とはいへるなり。人げなき

〔**釈**〕いと慢られて、人がましくももてなされぬを、「人氣なき」といへり。

よこぎまなるやうにて

〔**細**〕あまりに寵甚しき故に、人の妬みなどつもりてうせぬれば、横死のやうに思へり。

心のやみ

〔**釈**〕子を思ふあまりの頑心を云。本の歌上に見えたり。

夜もふけぬ

〔**評**〕此語めでたし。上に「夜ふけ侍りぬべし、とていそぐ」といひて、さて母君の長き物語をいひ終られたる故に、まさしく夜のふけたるよしをここに挿みてあらはしおく也。かくて直に命婦の帰ることをいはずして、なほそのあへしらの答を記されたる、いといといみじき筆といふべし。

ながかるまじきなりけり

〔**新**〕かくほどなく別れ給はんさいつさがとて、人めおどろくばかり思されしと也。

よにいささかも云々

〔**新**〕主上の帯のおぼしめしも、此人故にはみだれ給へる也。かの後涼殿の更衣の局を外へうつされしほどの類也。

きかたはしをだに、はるくばかりに聞えまほしう侍るを、わたくし私

にも、心のどかにまかで給へ。としごろうれしくおもたしきついでトキド

でのみ、たちより給ひしものを、かかる御せうそにて、みたてアヒ

まつる。かへすがへすつれなき命にも侍るかな。生れし時より、おカ

もふ心ありし人にて、故大納言いまはとなるまで、ただこの人の宮更衣

づかへのほい、かならずとげさせ奉れ、我なくなりぬとて、くちをラチモ

しう思ひくつぼるな、とかへすがへすいさめおかれ侍しかば、はかシツ

ばかしうしろみ思ふ人なきまじらひは、中々なるべきこと、と思ナマナカ

ひ給へながら、ただかのゆゑんをたがへじ、とばかりに、いだし△ミヤツカヘニ

たて侍りしを、身にあまるまでの御心ぎしの、よろづにかたじけな万事アリガタ

きに、人げなきはぢをかくしつづ、まじらひ給ふめりつるを、人のヤウニミエタガ

そねみふかくつもり、やすからぬことおほくなりそひ侍るに、よこ横

さまなるやうにて、つひにかくなり侍りぬれば、かへりてはつらくウセ玉ヘルコト也

なん、かしこき御心ぎしを思ひ給へ侍る。これもわりなき心のやみスチナキ

になん、といひもやらす、むせかへり給ふほどに、夜もふけぬ。う命婦

へもしかなん、わが御心ながら、あながちに、人めおどろくばかりホドニ

おぼされしも、ながかるまじきなりけりといまはつらかりける人の△カエツテ

ちぎりになん、世にいささかも、人の心をまげたることはあらじ、アルマイ

とおもふを、ただこの人ゆゑにて、あまたさるまじき人のうらみを根ヲオフマジキノ根ヲオヒシト也

おひしはてはては、かう打すてられて、心をきめんかたなきに、いヤウモ

さきの世ゆかしうなん

〔新〕前世にいかなる契り有てか、と也。

うちかへしつ御しほたれがちに

〔釈〕「うちかへし」は、打返し打返し幾度もたまふ意なり。「しほたれがち」は、涙がちといふをかくいへる也。

かたりてつきせず

〔釈〕いつまで語りても物語の尽ぬ意也。上に「夜更侍りぬべし、とていそぐ」といへるを結ばんとて、かくいへる也。なくなく

〔玉〕此詞は下の「いそぎ参る」といふへかかれり。此類つねにおほし云々。夜いたうふけぬれば

〔玉〕或抄に、「前に『夜もふけぬ』といへる故に、ここには『いたうふけぬれば』とかけり」といへる、まことに心をつくべきふしなり。すべて此物語は、かく何となき詞にも心をいれたる所多きぞかし。いそぎまゐる

〔評〕ここにて命婦の立てかへる也。次の事どもは、其かへりさまの事をいひて、余情をおもはしむる法なり。この類次下におほし。心得おくべし。月が入がたの空きよう云々

〔評上〕「夕月夜のをかしき」といひ、「月かげばかりぞ」といへる脈なる事は、諸注にいはれたるがごとし。但、月のみならず、風の事も又同じ脈にて、「野分たちて」といひ、「野分にいとどあれたるこちして」といひ、さてここに「風いと涼しく」といへる、荒かりし風のやうやう吹しづまりて、月かげのすずしく澄たるさまひびきあひて、えもいはれぬけしき也。「草むら」とあるも、前に「草もたかくなり」といひ、「やへむぐら」「よもぎふ」などいへる脈なるが、ここに至りて虫の声をそへ出して、次の歌の種としたり。心をつけて見るべし。もよほしがほなるも

〔釈〕「涙」といはずして「催しがほ」といへる、おもしろし。旧注に、「哀を催す也」とあるはたがへり。虫のなくといふに、涙をおもはするは歌詞のつねなれば、「涙を」催すなり。立はなれにくき

〔釈〕或抄に「あはれにものがなしきすまひを見すてがたき心也」といへり。

草のもとなり

〔新上〕「草も高くなり」、また「よもぎふの露わけ」といへり。

〔河〕蓬がもどと同じ風情歎。

すずむしの云々

〔釈〕「虫の声々」とある中より、鈴虫一つをとり出て、枕詞におきたり。そはやがてふるといはん料也。さて意は、鈴虫のごとく声のかぎりを尽してなくとも、秋の長き夜もあきたらずして、いつまでも出くるなみだかな、といへるにて、「降る涙」とは、涙を雨にとりなせるより出たる歌詞なり。えものりやらず

〔新〕命婦此あはれを見すてがたくて、車にのりかぬるなり。「立はなれにくき草のもと」といへるもこれ也云々。

いとどしく云々

〔釈〕「いとどしく」は「露おきそふる」へかかる語脈也。さて「虫の音しげきあさぢふに」とは、「なく声のしげき宿に」といふ意、「露おきそふる」は「涙をながし添る」といふたとへ也。「雲の上人」は、勅使の命婦をさしたる事論なし。諸注、解ぎま紛らはしくて、一首の意たしかならず。

かごと聞えつべくなん

〔新〕もとよりなげきの露ふかき浅ぢふに、御使につけて涙をそふれば、かちごともいふべきと也。

〔釈〕この説のごとし。「かち」は、物によそへて怨をいふことなり。いはせ給ふ

〔新〕すでに車よせて乗などする間に、人して返しをいひ出せしなり。

御おくつもの

〔玉〕すべて「おくり物」といふは、客のかへるを送る時に贈る物をいひて、送物也。ただなべて贈る物にはあらず。

うい

〔余〕漢王莽伝「礼儀調度」とあり。和名抄に調度部あり。

〔釈〕今俗にいふ道具のことなり。さてこれは、下に「しるしのかんざしならましかば」とあるくだりの用に、御々し上の調度めく物をそへたる也。心得おくべし。

とど人わろく、かたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなん、

ザマワルク

グ

チ

成

宛

前世ノ宿業也

シラマホシウ

とうちかへしつ、御しほたれがちにのみおはします、とかたりて

ウ

ケリ

シウ

ウ

タ

ハカリ

語

つきせず。なくなく、夜いたうふけぬれば、こよひすぐさず、御か

△ハナシガ

\*命婦

\*甚

更

△ラ

へりそうせんとて、いそぎまゐる。月が入がたの空きようすみわた

ヘリ

奏

\*カ

カ

ハル

清

澄

れるに、風いとすずしく吹て、草むらの虫のこゑこゑ、もよほしが

涼

\*カ

ハル

清

澄

△ナミタラ

催

ほなるも、たちはなれにくき、草のもとなり。

立

\*カ

離

すずむしの声のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだか

\*命婦歌

な。えものりやらず、

\*命婦重二也

いとどしくむしのねしげきあさぢふに露おきそふる雲のうへ人。

\*更衣母

かごと聞えつべくなん、といはせ給ふ。をかしき御おくりものな

\*カ

マウシ

\*カ

△ハシテ

草子地

フ

ワリ

ウ

ナ

送

物

フソク

マウシ

△ハシテ

フ

ワリ

ウ

ナ

送

物

ど、あるべきをりにもあらねば、ただかの御かたみにとて、かかる

ジセツ

更衣

形見

ようもや、とのこしおき給へりける、御さうぞくひとくだり、御ぐ

用

△アラン

\*装束

一

顔

しあげのうどうどめく物そへ給ふ。わかき人々、かなしきことはさら

\*調度

副

コレヨリ立カヘリテ祐宮ヲ参内サセ奉リ玉ハ又故ヲコトワル也

女房たち也

イ

フ

イ

フ

イ

フ

イ

フ

すがすがとも云々なりけり

玉 すべて文に「なりけり」といへるは、上の事のよしを、解釈したるごとき語のとちめにおく辞なり云々。この次に「御物語せさせ給ふなりけり」といへるも、帝のまだ大のごもらざるよしを解釈したる文のとちめ也。みな此意なり。

命婦は云々

評 これより命婦がかへり参りたる事をかける也。さてその帰りたる事をば省きて、命婦がおもふ心より書出られたる、なかなかめでたし。上に「夕月夜のをかしきほどに、出たてさせ給ひて、やがてながめおはします」といへる所をうけて継ぎたる所なり。よくよくあぢはふべし。おまへのつぼせんざいの

河 壺前栽は、清涼殿の東庭并に西庭朝餉并に台盤所の前にあり云々。

秋 「壺」とは小庭の事也。「前栽」は字のごとく、家の前庭に草木を栽るをいふ。ここは秋草の花盛なるさまなり。

御覧するやうにて

万 「御らんするやうにて」とかける詞おもしろき也。命婦のかへるを、御心には下まぢ給へども、うへは草花を御らんするやうにて、との心なり。落着は、人目をいささかばかり給ふ御心なるべし。

長恨歌の御系亭子院のかかせ給ひて

玉 此絵を亭子院の御みづから書給へるやうに聞ゆれども、さにはあらず。絵師におほせてかかせ給へる也。さて上に「女房四五人、さふらはせ給ひて、御物語せさせ給ふ」といへるは、すなはちこの長恨歌のすぢの事を御物語せさせ給ふ也。「ただそのすぢをぞ、まくらごと」といへる、すなはち上の御物語をさせ給ふよしをことわれる也。此所かやうに見ざれば、長恨歌の絵、歌の事、ここにはよしなし。

いせつらゆきに

秋 此御屏風の事は、伊勢集に見えなれば、実に伝はりてありしにこそ。きはめて名高き御物なりけんぞおぼゆる。かれここにそれを借出で、そのありさまを実にしたる文なり。かかる事猶おほし。

もろこしのうたをも

秋 これは伊勢貫之とは別なる文人におほせて、かかしめ給へるなるべし。詩の事をはぶきていはぬは、ここに用なき事なればなり。

ただそのすぢをぞまくらごとせさせ給ふ

秋 ただ長恨歌にいへる、妻におくれたるすぢの事をのみ言種にし給ふなり。まくら言とは、俗に寝ばなしといはんがごとき意也。寝ころびて物語する事也。諸注、心得かねられたりとおぼしくて、慥なる説なし。さてここまででは帝の御ありさまを語る也。

しのびやかに奏す

秋 この「奏す」とある中に、口づからの御返答もみなおしこめて省きたる也。

おき所も侍らず

秋 かたじけなき仰事は、蓬生の宿に置べき所もなし、との意にて、ふかく謝し奉りたる詞也。

あらし風云々

新 はぐくみ奉るべき母御息所はあらずなりて、御子のうへも心もとなし、とよめる也。拾遺集長歌に、たのもしき陰に二たびおくれたる二葉の草をふく風のあらしかたにはあてじとてせばき袂をふせぎつつ、とよめり。

などやうにみだりがはしきを

玉 「みだりがはしき」とは、歌のよろしからざるよし也。「などやうに」と歌よりつづきたるにて心得べし云々。さて此歌、実にみだりがはしきにはあらず。例の紫式部が卑下の心ばへにて、かくいひなせるもの也云々。

かくても月日はへにけりと

細抄 身をうしと思ふに消ぬ物なればかくてもへぬる世にこそ有けれ、といふ歌のこころなり。

にもいはず、内わたりをあさゆふにならひて、いとさうざうしく、  
ニモ オヨバズ 禁中 朝 タ ナレテ △カク籠もり居ル△モノサビシク

うへの御ありさまなど、思ひいできこゆれば、とくまゐり給はんこ  
上 △ヤク△内裏へ

とを、そそのかし聞ゆれど、かくいまいましき身のそひ奉らんも、  
母君心 エンギノワルイ △若宮二

いと人ぎきうかるべし。又見奉らでしばしもあらんは、いとうしろ  
グワイフン 憂 △ワカ宮ヲ 暫時 在 キツカ

めたう思ひ聞え給ひて、すがすがともえまぬらせ奉り給はぬなりけ  
ハシク サツサツ サツバリ

り命婦は、まだおほとのごもらせ給はざりけるを、あはれに見た  
△帝ノ 大 殿 隠 オイトシウ

てまつる。おまへのつぼせんざいの、いとおもしろきさかりなるを、  
御前 壺 △草花ノ 盛

御らんずるやうにて、しのびやかに、心にくきかぎりの女房四五人、  
フリ ヒンヤカ オクユカシイ

さふらはせ給ひて、御物がたりをせさせ給ふなりけり。このごろあ  
侍 ハナシ 頃 日

けくれ御覧する。ちやうごんかの御系、亭子院のかかせ給ひて、い  
旦 暮 テイジンノキン 宇多天皇ノ御事 令 書 伊 即チ寛平法皇ナリ

せつらゆきによませ給へる、やまとことのはをも、もろこしのうた  
勢 貫 之 令 詠 大 和 言 葉 唐 土 詩

をも、ただそのすぢをぞ、まくらごとせさせ給ふ。いとこまやか  
唯 枕 言 帝 命 婦 二 巨 細

に有さまをとほせ給ふ。あはれなりつること、しのびやかにそうす。  
△更衣ノ里ノ 間 △マノ ヒンヤカ △母君 奏

御返り御らんずれば、いとまかしこきは、おき所も侍らず。かかる  
△ハシジ 母君の御こたへがみの詞 アリガタキ 置

おほせごとにつけても、かきくらすみだりごこちになん。  
勅 命 昏

あらし風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづ心なき。  
更衣母 防 蔭 枯 わか宮ノ事 静

などやうにみだりがはしきを、心をさめざりけるほどと、御覧じゆ  
草子地 乱 雜 △母君ノ ジブン

るすべし。いとかうしも見えじ、とおぼししづむれど、さらになし  
イ人ニ 如此 △イヒガヒチノミラレマイ 鎮

のびあへさせ給はず。御らんじはじめし年月のことさへかきあつめ、  
コラハトゲ △更衣ヲ 始 マデ 挿 集

よろづにおほしつづけられて、時のまもおぼつかなかりしを、かく  
帝御心 マチ下ホナリ 更衣ノ

かひあるさまにとこそ

〔釈〕湖月傍注に、「更衣を后にもと思召たるべし」とあれど、必しも后にもといふ意にはあらず。女御などの意にはあるべけれど、ただかひあるさまに、どのみ見てあるべし。

かくてもおのづから

〔玉〕「かくても」は、更衣はなくなられても也。「おのづから」は、「さるべきついでも」といふへかかれり。「若宮云々」へはかからず。

なき人のすみかたづね出たりけん云々

〔玉〕あけくれ長恨歌の事をまくらごにせさせ給ふほどなるから、ふと此事をおぼしめしよれること、よしあること也。

〔評〕上に「みぐし上のでうごめくもの」といへるを、ここにて頭はし出たる巧み、さらにいとめでたし。長恨歌に、臨邛道士鴻都客、能以二精誠致魂魄、為感君王展軛思、遂教方士殷勤覓云々。唯将旧物表深情、鈿合金釵寄将去、釵留一股合一扇、釵擘黄金合分鈿、但令心似金鈿堅云云とあり。

たづねゆく云々

〔新〕かの幻のわざする人もあれかし、それをやがて伝にても御息所の靈のあり所だにしたらばや、と也。まぼろしとは、幻術する人をいふ。幻のことは、虚幻詭誕惑人たと字注にいへり。

〔釈〕「まぼろし」は、こは幻師といふ意にて、かの方士をさしたる也。し一つ省けるは、例也。さてこの「まぼろし」、はるかに末なる幻の巻に、「大空をかまふまぼろし云々」といふ歌の所へかけて、ふかき意の照応ありとおぼしきよしあり。そこにいふべし。いとにほひすくなし

〔新〕よく書し絵といへど、実の人のやうに艶色のなきなり。

太液の芙蓉云々

〔奥入〕長恨歌云、太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉、太液は池の名、芙蓉ははちす也。未央は宮殿の名なり。

けにかよひたりしかたちを

〔釈〕氣に似ひたりし容貌也。「げに」とよみたる注はひがこと也。氣は楊貴妃の氣色に也。「かよひ」は似通ふなること、例いと多し。さて「かたちを」の下に、語脱たるなるべし。さらでは聞えがたし。試にいはいば、おもふになどやありけん。なほ考ふべし。からめいたるよそひはうるはしうこそ

〔玉〕すべて「うるはしう」といふ言は、古書にては美麗の意なれども、

物語などにいへるはただ美麗の意にはあらで、俗言に、きつとしてかたといふ意、みだれず正しき意にいへり。こは、楊貴妃の唐めきたるよそひは、あまりきつとしてかたくて、たをやかにはあらざりけん、といへる也。

花鳥の色にも音にも

〔玉〕かの楊貴妃がたちは、猶芙蓉柳などにもたとへしを、更衣のかたちは、然たとふべき物もなくすぐれたりし、と也。

はねをならべ云々

〔河〕長恨歌に、在天願作比翼鳥、在地願為連理枝。かなはざりけるいのちのほどぞ

〔新〕前に、「かぎりあらん道にも、おくれさきたたじ、と契らせ給ふ」と有しも、此翼をならべ云々の事也。且歌に、「かぎりとしてわかるる道のかなしきに」と御休所のよみしなども、あはせ見るべし。

つきせすつらめしき

〔釈〕長恨歌の結句に、天長地久有時尽、此恨綿々無絶期、とあるをおもはれたる句なるべし。長恨歌といふ題は、此句にてつけたるなり。こは因にいふのみぞ。

風のおとむしのねにつけても

〔評〕此段また風と虫とをとり出て、帝の御悲みの種としたり。さて次に、月をば転じて、弘徽殿女御の遊興の種として、更に帝の御思ひをまさせたる文のたくみ、いひしらずめでたし。此所、虫と風とのとちめ条なり。心をつくべし。

弘徽殿には久しう云々

〔評〕もの妬みしてひがひがしき女の情を、いとよくうつされたり。これはた前後に見えたる主客の脈なり。

ても月日はへにけり、とあさましうおぼしめさる。故大納言のゆる御詞も遺ウセ玉ヒテモ也経 アキレハテテキヨウサメウ

ごむあやまたず、宮づかへのほいふかく物したりしよろこびは、か本意マチガヘズヘンレイ

ひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、いふかひなしや、とうちの給

はせて、いとあはれにおぼしやる。かくてもおのづから、わか宮な帝御詞コレデモ自然

どおひいで給はば、さるべきついでもありなん。命ながくこそお然セイジンシジセツ

もひねんぜめ。などのたまはず。かのおくり物御らんぜさす。なき帝御心コラハヨ命婦へニイレル亡

人のすみかたづねいでたりけん、しるしのかんざしならましかば、住所サガシダシ証抛金釵

とおもほすもいとかひなし。△セメテハナクサマン△ソレチラネハ

たづねゆくまぼろしもがなつてにてもたまのありかをそことしる帝幻術士伝魂其処

べく。糸にかける楊貴妃のかたちは、いみじき糸しといへども、筆イカきたる容貌上手

かぎりありければ、いとにほひすくなし。太液の芙蓉、未央の柳も、\*タイエキフヨウビヤウ

けにかよひたりしかたちを、\*からめいたるよそひは、うるはしう脱文アルベシ靴端正

こそありけめ。\*なつかしうらうたげなりしを、おぼしいづるに、花△更衣アイラシウカハユラシゲ

鳥の色にも音にも、よそふべきかたぞなき。朝夕のことくさに、は擬モノ言種

ねをならべ、えだとかはさん、とちぎらせ給ひしに、かなはざりけ翼比枝交約

るいのちのほどぞ、つきせすつらめしき。風のおと虫のねにつけて\*根\*

も、物のみかなしうおぼさるるに、弘徽殿には、ひさしううへの御\*コキデン久上

つぼねにも、まうのぼり給はず。月のおもしろきに、夜ふくるま局参上

で、あそびをぞし給ふなる。いとすさまじう、ものしときこしめす。帝不用ラシウモノスゴウオキザハリニ

此比の御けしきを見たてまつる、うへ人女房などは、かたはらいた管絃為御近侍セウシセンバ

月もいりぬ

〔細〕此詞殊勝なり。前に「夕月」とかき、「入がたの空」と書て、「月もいりぬ」といふ妙也。

〔釈〕此御説のごとし。但、月のみにはあらず、風も又添たる事、上に注するがごとし。此句、月のとぢめ也。

雲のうへも云々  
〔玉〕「いかですむらん」とは、雲の上にてだに涙にくるる月なれば、まして浅茅生のやどには月影のいかで清む、さこそ涙にくるらめ、と月のすむことをいひて、住をかねたり。

ともし火を  
〔輿入〕長恨歌 夕殿螢飛思悄然、秋燈挑尽未能眠、遅々鐘鼓初長夜、耿耿星河欲曙天。

〔釈〕秋燈、一本孤燈と有。下二句は余滴に従ひて、今加へ引つ。

うこんのつかさとのる申  
〔釈〕右近のつかさは、右近衛府也。とのるまうしとは、直宿に侍らふ武官の人々、各の名をなりの申す事也。其声をきこしめして、夜の更たるを知しめす意也。右近衛のとのる申は、丑の一刻なり。

あくるもしらでと  
〔釈〕上に見えたる長恨歌の御屏風の絵によめる伊勢が歌の詞をとられたり。玉すだれあくるもしらでねし物を夢にも見じとおもひかけきや伊勢集に見えたり。これは長恨歌の、春宵苦短日高起、また、悠悠生死別經年、魂魄不曾來入夢、といふ句もてよめる歌なり。

なほあさまつりごとは  
〔輿入〕長恨歌 春宵苦短日高起、從是君王不早朝。

〔細〕長恨歌には、貴妃が寵によりて也。ここは更衣の御歎きにおこたらせ給ふ也。「猶」の字、殊勝なり。

〔評〕この御説のごとく、楽みと悲みとどりかへられたるにて、少しも彼を襲はずして、かへりて新しくめでたきひびきとなれり。

あさがれひのけしきばかり

〔釈〕案に、のもし穩かならず。もしくはのみにと有しを脱せるにや。

〔細〕朝がれひは女房の陪膳、大床子は殿上人の陪膳也。いづれをも御覽じいれぬと也。

〔玉〕このやうは、大床子のおものは外さま、朝がれひは御内々也。「大床子の御ものなどは、いとほるかにおぼしめしたれば」といへるにてしるべし。大床子のを「常の御膳也」といへる注はまぎらはし。

すべてちかうさふらふかぎりは云々

〔評〕「はいぜんにさふらふかぎりは云々」といひて、又「ちかうさふらふかぎりは」といへるは、いたづらに重なりたる如くなれど、然らず。ここは帝の更衣を寵し給ふ事のとぢめなる故に、殊にはしをおこして「すべて云々」といひ、又立かへりて「そこの人の人の讒恨をも云々」と語りて、つひに「他朝のためしまで引出つ」といへるにて、巻首に「人のそしりをもえ懼らせ給はず、よのためしにもなりぬべき」といひ、「楊貴妃のためしも引出つべうなりゆく」といひて、女御・更衣より公卿・殿上人に及び、つひに天下の人のもてなやみぐさになりたりといへる事の、首尾を合せて結びたる也。さて「楊貴妃のためし」といへるよりこなた、かの長恨歌の句をとりて、ここかしこ挿み入られたるが、彼意のままにはとらずして、みな事をかへて引用あるなど、すべて妙なりとも妙なる物にて、もろこし人のいはゆる「換骨奪胎」といふべきこと也。

月日へてわか宮参り給ひぬ

〔新令の定め、父母の喪は服一年、暇五十日にて、其後今にかはらず。然れば、このわか宮も御暇五十日を過てはあまり給ふべきを、かの祖母君のすがすがとも参らせ給はで、月日おほく過して其年の冬にいたりて参らせしなり云々。下略。

いとこの世の物ならず  
〔玉〕久しく見給はで、月日へて見給ふゆゑに、いよいようつくしくなりまさり給へるなり云々。

いとひきごさまほし  
〔釈〕一の宮を引こして、わか宮を東宮にせまほしうおぼししと也。

しとききけり。いと<sup>草子地</sup>おしたちかどかどしき所ものし給ふ御かたにて、<sup>押立</sup>キツカリトシタ

ことにもあらずおぼしけちて、もてなし給ふなるべし。月もいりぬ。<sup>新物の敷ともせめ也</sup>  
△更衣ノコトナドハ

雲のうへもなみだにくるる秋の月いかですむらんあさぢふのや<sup>湖歌より詞につけてよむべし</sup>  
△おぼしやりつつ、ともし火をかかげつつして、おきおはします。<sup>燵</sup>

右近のつかさの、とのあまうしの声聞ゆるは、うしになりぬるなる<sup>右近衛府直宿奏</sup>

べし。人めをおぼしてよるのおとどにいらせ給ひても、まどろませ<sup>いなほ</sup>

給ふことかたし。あしたにおきさせ給ふとても、あくるもしらで、<sup>難</sup>

とおもほしいづるにも、なほあさまつりごとは、おこたらせ給ひぬ<sup>ヤハリ朝政</sup>

べかめり。ものなどもきこしめさず、あさがれひのけしきばかりふ<sup>御</sup>

れさせ給ひて、大床子の御ものなどは、いとほるかにおぼしめした<sup>シヤウジ</sup>

れば、はいぜんにさふらふかぎりは、こころぐるしき御けしきを、<sup>陪膳侍</sup>

見たてまつりなげく。すべてちかうさふらふかぎりは、をとこ女、<sup>歎近侍</sup>

いとわりなきわざかな、といひあはせつつなげく。さるべき契りこ<sup>ヨギナキコト</sup>

そはおはしましけめ、そこらの人のそしりうらみをも、はばからせ<sup>許多</sup>

給はず、この御事にふれたることをば、だうりをもうしなはせ給ひ、<sup>道</sup>

今はたかく世中のことをも、おぼしすてたるやうになりゆくは、い<sup>モマタ</sup>

とたいだいしきわざなり、と人のみかどのためしまでひきいでつつ、<sup>他朝例</sup>

ささめきなげきけり』月日へて、わか宮まあり給ひぬ。いとこの<sup>ササヤキ</sup>

世の物ならず、きよらにおよずけ給へれば、いとどゆゆうおぼし<sup>帝御心</sup>

たり。あくるとしの春、坊さだまり給ふにも、いとひきごさまほし<sup>立太子ノ御事ヲ定メ玉フ也</sup>

なかなかあやふく

〔玉〕源氏君を坊に立給ふ事を、あやふくおぼしめす也。

かぎりこそ有けれ

〔玉〕帝の源氏君をさばかり思しめせども、かぎり有て、坊にはえ立給はざりけるよ、と世人申す也。

女御も御心おちる給ひぬ

〔玉補〕前の「二のみこの女御は、覚し疑へり」に応ぜり。

なぐさむかたなく

〔釈〕更衣のうせ給ひしよりこのかた、なぐさむかたなく思ひなげき給ふ意なり。旧注に、「源氏君立坊の義もやとたのみ給ひしかども、さもなかりしかば、なぐさむかたなく也」といへるは、過たるべし。

みこむつになり給ふ

〔新〕右の一の宮、坊にさだまり給ふより、御祖母の卒までの間に年ありて、今六歳になり給ふ也。

このたびはおほしりて

〔釈〕上の更衣の卒し給へる処に、「何事かあらんともおもほしたらず」といへるをうけて、六歳になり給へれば、この度は死ぬといふ事を思し知て恋歎き給ふ、といへる也。

としごろなれむつび云々

〔評〕祖母君の情を推量りたる文にて、つゆばかりも透間なき書ざまなり。此人はさしも用なければ、うせ給へる事をここにいひて、先かくしたる也。

今は内にのみ

〔評〕源氏君の内ずみし給ふ事を、先いひ出しておく也。文のかはりめに心を着べし。

ふみはじめなど

〔釈〕御読書始也。博士をめて御注の孝経をよみそめ給ふ也。御注は、唐の玄宗の注したるなり。さて、「など」といへる中に、其ほかの諸芸をもならひ始給へる事をこめたり。

よにししす

〔釈〕すべてかく「世に云々」といふは、いみじく勝れたるよしをいへるにて、此世の中には未知ずといふ意也。他もこれに准へてしるべし。

おそろしきまで

〔釈〕才気のすぐれたるに肝をつぶし給ふさま也。かやうのおそろしきは、今俗にもいふ語也。旧注に、「命の長からぬ物なれば」とあるはひがごと也。はは君なくてだに

〔新〕母君は妬れてうせられたれば、御子をだにらうたくし給へ、と也。

〔釈〕案に、旧注もこの意に解れたれど、だにの辞「なくて」の下にありては、さやうには聞えぬこと也。もしくは、「母君ならでだに」とありしを、「なくて」と写し誤れるか。さらば、わか宮の実際の御母ならずとも、といふ意になりて、聞ゆべし。猶考ふべし。さて、「今はたれもたれもえにくみ給はじ」といふは、帝のわか宮にの給へる語、「母君ならでだに」は、弘徽殿女御にの給へる語也。思ひわかつべし。

みすのうちに

〔釈〕いと幼き人といへども、男子をばみだりに簾の内へ入れざりし昔の風俗思ふべし。

いみじきものふあだがたき

〔釈〕この物語かかれたる比の世には、武士は物のあはれしらぬものの一くさにかぞへられたる世ざまなりき。この事いたく論ある事なれど、ここに用なければ略きていはず。「あた」のたは清み、「かたき」のかは濁りてよむべし。さてかくいふは、源氏君のかたちのためたきよしをほむる例の脈にて、弘徽殿の女御さへつひにえさしはなち給はぬといへるにて、その容貌のいみじくめでたきよしはしられたり。

女御子たち二ところ

〔釈〕かく女みこたちとくらべて、猶まされるさまにいへるにて、ますます源氏君のめでたきはしられたり。

今よりなまめかしうはづかしげに

〔釈〕わか宮六歳なれど、かたちめでたくおほする故に、色めきたるやうにおぼえて打向ふ人々のはづかしくおぼえ給ふ也。故「打とけぬあそびぐさ」といへり。「打とけぬ」は、心のおかれて用意する事、「あそびぐさ」は、翫び種といふ意也。さてここまでは、容貌のいみじきを賞たる也。次は才能の事を称する也。

くもるをひびかし

〔釈〕雲の居る天までも響かし、といへるによそへて、大宮人のほめののしる事を聞せたる也。

うおぼせど、御うしろみすべき人もなく、また世のうけひくまじき

ことなれば、なかなかあやふくおぼしはばかりて、色にも出させ給

はずなりぬるを、さばかりおぼしたれど、かぎりこそありけれ、と

よの人も聞え、女御も御ころおちみ給ひぬ◎かの御おぼきたのか

た、なぐさむかたなくおぼししづみて、おはすらん所にだに、たず

ねゆかん、とねがひ給ひしるしにや、つひにうせ給ひぬれば、ま

たこれをかなしひおぼすことかぎりなし。みこむつになり給ふ年な

れば、このたびはおぼしりて、こひなげき給ふ。としごろなれむ

つび聞え給へるを、見奉りおくかなしひをなん、かへすがへすの給

ひける◎今はうちにのみさぶらひ給ふ◎七つになり給へば、ふみは

じめなどせさせ給ひて、よにいらささとうかしこくおはすれば、あ

まりにおそろしきまで御らんず。今はたれもたれもえにくみ給はじ。

はは君なくてだにらうたうし給へ、とて弘徽殿などにも、わたらせ

給ふ御ともには、やがてみすのうちにいれ奉り給ふ。いみじきもの

のふあだがたきなりとも、見ては打ゑまれぬべきさまのし給へれば、

えさしはなち給はず。女みこたちふたところ、此御はらにおはしま

せど、なづらひ給ふべきだにぞなかりける。御かたがたもかくれ給

はず、今よりなまめかしくはづかしげにおはすれば、いとをかしう

うちとけぬあそびぐさに、たれもたれも思ひ聞え給へり。わざとの

御がくもんはさるものにて、ことぶえのねにもくもるをひびかし、

御がくもんはさるものにて、ことぶえのねにもくもるをひびかし、

御がくもんはさるものにて、ことぶえのねにもくもるをひびかし、

ことごとしううたてぞなりぬべき  
〔**釈**〕「うたて」といふ詞は、甚だしければ却てわろくなる意にかひたり。こころも其意にて、わか宮の才能を一つづついひつづくれば、かへりて作り事めきてあしくなる、といふ意なり。

宇多の帝の御いましめ

〔**奥人**〕寛平遺戒云、外蕃之人必可召見者、在簾中見之不可直对耳。〔**新**〕外蕃の使人朝参の時は、天子顕れ給ふ也。これは、使にても別に召るるをりか、又はおのづから来れる韓人などを給ふなるべし。さてこの相人は、使のため来れるにもあれ、みこの御相のために召ん事は、右の御戒に准じてはばかり給ふ、となるべし。

鴻臚館

〔**河**〕職員令云、玄蕃寮頭一人、掌仏寺僧尼、名籍蕃客、辞見讒讒、送迎及在京夷狄監、当館舍之事。〔**義**〕謂、鴻臚館也。

〔**釈**〕外蕃の人をおく処をもろこしにて鴻臚寺といふによりて、玄蕃寮なるをも鴻臚館とつけられし也。ここにこまうどはさしおかれたれば、わか宮をそこへ遣はし給ふ也。

ゐてたてまつる

〔**釈**〕「ゐて」は、引つれてといふ意也。万葉集に率字をよめる、よくあたり。下皆ここにならふべし。

かたふきあやしふ

〔**釈**〕ものを考ふる時は首を傾くるものなる故に、考る事を「かたふく」といへるなり。下皆同じ。

国のおやとなりて

〔**釈**〕漢ぶみに「民之父母」といふ語のあるによりて、みかどを「国のおや」といへる也。

そなたにてみれば

〔**釈**〕「そなた」とは、帝王の相をさしていへる也。

おほやけのかためとなりて云々

〔**釈**〕「朝廷のかため」といへるにて、摂政関白などの事也。

〔**玉**〕摂政関白などと成給ふべき相かとも思へども、帝王の相なれば、摂関にしては其相たがふべしといふなり。

〔**評**〕この一段は、源氏君一代のうちに有べき事を思ひかまへて、この相人に先いはせたるにて、いともの巧みなる伏案なり。よくよく心を

付べし。初にかたちのめでたきをいひ、次に才能のいみじきをいひ、ここに至りて一世の吉凶をことわれる伝文の法なり。これより下の詩文の事どもは、ただこのにほひにかきそへて、源氏君の秀才なるよしをほめたるまで也。

ぐえかしこぎ

〔**釈**〕先達のいはれしごとく、巻中に「ぐえ」といへるは、ことごとく秀才の事にて、学問といはんがごとし。ただに才氣の事にはあらず。心得おくべし。

いみじきおくり物

〔**新**〕此ささげものの事、梅がえの巻にいささか出たり。

いかなる事にかと

〔**抄**〕東宮を立かへ給はんか、など思ふ疑ひの有なるべし。

やまとさうをおほせて

〔**玉**〕みかどの御心に、此御子をもし親王にもなさば、人の疑ひなど出来てかへりて御ためよろしからじ、と考へ給へることを、やがて「やまとさう」とはいへるなり云々。やまと相としもいへるは、こまの相人のことをいへる所なる故なり。さて相といふから「おほせて」ともいへるなり。さう人はまことにかしこかりけり

〔**玉**〕高麗の相人の「みだれうれふる事やあらん」と申せるが、御みづからおぼしめし考へたる所とあへる故に、「相人はかしこかりけり」とおぼせる也。

すべていひつづけば、ことごとしううたてぞなりぬべき、人の御さ  
〔**意**〕 ギヤウサンデカヘツテワルク ヒヨナナコトニ

まなりける『そのころこまうどのまぬれるが中に、かしこき相人あ  
〔**高麗人**〕 参有 上手ノ ヒテ

りけるを、きこしめして宮のうちにめさんことは、うだのみかどの  
〔**寛平法皇の御事也**〕 宇多 帝

御いましめあれば、いみじうしのびて、このみこを鴻臚館につかは  
〔**若宮**〕 \*◆コウロクワン

したり。御うしろみだちてつかうまつる、右大弁のこのやうにおも  
〔**後**〕 見メキ 子

はせて、ゐてたてまつる。相人おどろきて、あまたたびかたぶきあ  
〔**率**〕 回数 頓

やしふ。国のおやとなりて、帝王のかみなきくらしいにのぼるべきさ  
〔**奇**〕 \*◆相人詞 父母 上 位 昇

う、おはします人の、そなたにてみれば、みだれうれふることやあ  
〔**相**〕 其方 乱 憂

らん。おほやけのかためとなりて、あめのしたをたすくるかたにて  
〔**朝**〕 廷 柱 石 天 下 相

みれば、又そのさうたがふべしといふ。弁もいとさえかしこきはか  
〔**相**〕 違 \*学才 博

せにて、いひかはしたる事どもなん、いとさようありける文などつ  
〔**士**〕 \*コマト 交 詩文ナド也

くりかはして、けふあすかへりさりなんとするに、かくありがたき  
〔**交**〕 湖高麗人が詩の心はへを尊子地にいふ也 △高麗へ メヅラシキ

人にたいめんしたるよろこび、かへりてはかなしかるべき心ばへを、  
〔**若**〕 若ミヤ 湖別を惜む心也 悲 莫チ

おもしろくつくりたるに、みこもいとあはれなるくをつくり給へる  
〔**句**〕 絶句ナルヘシ

を、かぎりなうめで奉りて、いみじきおくり物どもをささげたてま  
〔**感**〕 賞 捧

つる。おほやけよりもおほくのものたまはす。おのづからことひろ  
〔**朝**〕 廷 物 白 然 比

ごりて、もらさせ給はねど、春宮のおほちおとどなど、いかなるこ  
〔**口**〕 ガリ 漏 祖父 右大臣

とにか、どおぼしうたがひてなんありける。みかどかしこき御心に、  
〔**疑**〕 △アラン 帝

やまとさうをおほせて、おほしよりにけるすぢなれば、いままでこ  
〔**相**〕 \* 寄 条

のきみを、みこにもなさせ給はざりけるを、相人はまことにかしこ  
〔**ワ**〕 カ宮 親王 実 賢

わが御世もいとさだめなきを

〔釈〕帝の、我御治世も定めがたく思しめすよし也。さるは、御悲みがちにて、御命もいかがとおぼせるなるべし。其ほどに若宮をゆくすゑたのもしきさまにせんとおもほすなり。

ただ人にておほやけの御後見を

〔釈〕この「ただ人」は、臣下の事をさせるなり。「御うしろみ」は、政を相くる事にて、撰関また大臣などなり。

ただ人はあたらしけれと

〔新〕世にたぐひなき光君を臣とせんは惜き事なれど也。

すくえうのかしこきみちの人に

〔孟〕宿曜師、昔は一の道也。二十八宿九曜の行度をもちて、人の運命を考るもの也。

〔釈〕宿曜のみちのかしこき人にといふ意也。源氏になし奉るべく

〔釈〕氏姓を賜はるは、臣となり給へるしるしなれば、世のうたがひをば負ひ給ふまじきなり。「源氏」の事は卷首にいへり。「おきて」は用言にて、さだめといふに同じ。

年月にそへて

〔釈〕こより藤壺中宮の御事を説出せり。桐壺更衣に似給へるによりて御心のとまること、紫の上の藤壺に似給へるゆゑに源氏君の御心のとりしがごとし。したごめおくべし。

なぐさむやと

〔新〕過にし更衣の事をおぼしうれへ給ふ御心を、少しもおもひ和み給ふかと也。

〔釈〕「さるべき人々」とは、然るべき女御更衣となり給ふべき人々也。なすらひに

〔釈〕「なすらひ」は、体言なり。更衣に准じ給ふばかりの人もなかりし也。いとかたき世かなと

〔釈〕准におぼさるる人だに有がたき世中かな、とやうにおぼして、さるべき人々を参らすることなどもうとましくおぼしめす意なり。

先帝の

〔釈〕いづれの帝などと、しひて准拠をいふ説はわるし。ただ「先帝」とのみ心得べし。

内侍のすけ

〔玉〕上に、ゆげいの命婦が「内侍のすけのそうし給ひし」といへると同人なるべきか。

〔釈〕さも有べし。此物語、不用なる人を出すにも、おのづからそのすぢある事多し。

今もほの見奉りて

〔釈〕幼くおほせし時より見奉りたるが、今もほのかには見奉るとなり。かくいふは、大人になり給へれば、みだりに人に対面し給ふ事のなればなり。物がたりのやう委しといふべし。

三代の宮つかへに

〔釈〕この桐つぼの帝まで御三代に伝はりて、宮つかへつかうまつるに、いまだ御やす所に似給へる人をば見すと也。旧注に「光孝・宇多・醍醐たるべきか」とあるを、玉小櫛にもとられたれど、しひて准拠をいはんはこの物語の例ならねば、新釈・余滴などにとられざしに従ふべし。

いとようおぼえて

〔釈〕「おぼえて」とは「似給ひて」といふことなり。卷中いづこもしかり。

ねんごろに聞えさせ給ひけり

〔湖〕四宮の御入内の事を申させ給ふなり。

〔釈〕こまでの語脈いささか紛らはしきを、しるしたる点によりて詞のかかる所思ひわくべき也。

かりけり、とおぼしあはせて、無品親王の、外戚のよせなきにては

ただよはさじ、わが御世もいとさだめなきを、ただ人にておほやけ

の御うしろみをするなん、ゆくさきもたのもしげなること、とおぼ

しさだめて、いよいよみちみちのざえをならはさせ給ふ。きはこと

にかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、みことなり給ひな

ば、世のうたがひおひ給ひぬべく、ものし給へば、すくえうのかし

こきみちの人に、かんがへさせ給ふにも、おなじさまにまうせば、

源氏になし奉るべく、おぼしおきてたり年月にそへて、みやす所

の御ことを、おぼしわするるをりなし。なぐさむや、とさるべき人々

をまぬらせ給へど、なすらひにおぼさるるだに、いとかたき世かな、

とうとましようのみ、よろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、

御かたちすぐれ給へる聞え、たかくおはします。ははぎさきよにな

くかしづき聞え給ふを、うへにさぶらふ内侍のすけは、先帝の御時

の人に、かの宮にも、したしうまおりなれたりければ、いはけな

くおはしましし時より見奉り、いまもほのみたてまつりて、うせ給

ひにしみやす所の御かたちに似給へる人を、三代のみやづかへにつ

たはりぬるに、え見たてまつりつけぬに、きさいの宮のひめみやこ

ぞ、いとようおぼえて、おひいでさせ給へりけれ。ありがたき御か

たち人になん、とそうしけるに、まことにや、と御ころとまりて、

ねんごろにきこえさせ給ひけり。ははぎさき、あなおそろしや、春

ねんごろにきこえさせ給ひけり。ははぎさき、あなおそろしや、春

ねんごろにきこえさせ給ひけり。ははぎさき、あなおそろしや、春

ねんごろにきこえさせ給ひけり。ははぎさき、あなおそろしや、春

きりつぼの更衣の

〔**釈**〕桐壺に居給ひし更衣といふ意也。

あらはにはかなくもてなされし

〔**釈**〕「あらはに」は、密にせずして、けざけざとあきらかにとおとしめあなづりてもてなされし意也。「ゆゆしう」は、かの嫉妬のために病がちになりてつひにうせ給へる故に、忌々しうとはの給へる也。

きさきもうせ給ひぬ

〔**評**〕この一段は藤壺中宮の伝なるが、まづ更衣に似給へるよしをいひて、帝の御心にかなひ給ふ故をあげ、さて直に入内し給へるさまにはいはで、御母后の一たびはうけひき給はざりしよしをいひて、さて後、后もうせ給ひて、つひに入内し給へるさまに書れたるは、例の事をかろくせずして、ますます帝の御心にかなひ給ふべき根ざしをふかくせんため也。其中に、つゆも事の情を失はぬ筆づかひ、いとめでたしとめでたし。さて、この后はさしも用なき人なれば、すみやかにうせ給へるよしをいひてとりかくされたる、又いとめでたし。

御うしろみたち

〔**釈**〕これは、さふらふ人々の中に殊に御うしろみをする人なるべし。玉小櫛補遣に、「たち」を濁りて、「さふらふ人々御後見だちて参らせ奉る也」といへるは、次になどおぼしなりて、といふにかなはず。たち、すみてよむべし。

兵部卿のみ

〔**細**〕紫上の父なり。後に式部卿なり。

うちずみ

〔**釈**〕入内して禁中に住給ふを「うちずみ」と云。

藤つぼと聞ゆ

〔**河**〕藤懸「蝦手木」。但、非「上古此木」歟。建曆御記

〔**釈**〕禁中五舎の一、飛香舎也。入内してそこに住給へるを、人みな藤壺と申す、との意也。

げに御かたちありさま

〔**釈**〕「げに」とは、前に「いとようおぼえて」と内侍のすけの奏したるをうけて「げに」といへる也。

人の御きはまさりて云々

〔**釈**〕先帝の姫宮なれば、世の思ひなしもめでたく、女御更衣たちもえお

としめ給はねば、おしたちてたらはぬころなし、となり。かれは人もゆるし聞えざりに云々

〔**釈**〕「かれ」とは、更衣の事也。さてここは、藤つぼの方を主といふ所なれば、まづ「彼は云々」といひて、次に「これは云々」といふべき抑揚の定れる法なるを、かく上下にとりかへられたるは奇といふべし。しばらく此二句を、「これは云々」の上へ入れて心得べし。さらでは勢ひ聞えがたかるべし。

おほしまぎるとはなけれど

〔**釈**〕更衣をかなしみ給ふ御心のまぎるとはなけれど、藤つぼの、更衣に似給へる故に、おのづから御心うつりて、前に参らせ給ふ人々よりは、格段におぼしなぐさむやうなるも、あはれなる御心ざし也、といふ意也。

源氏の君は

〔**新**〕前に、源氏にせんの御おきて有し事をいひて、其後宣下ありし事は略せり云々。

ましてしげくわたらせ給ふ御かたは

〔**釈**〕前に、「弘徽殿などにも、わたらせ給ふ御どもには、やがてみすの内にいれ奉り給ふ云々。御かたがたもかくれ給はず云々」とあるをうけてかかれたり。帝のしげくわたらせ給ふ御方は、源氏君も御供にてたびたびわたり給へば、つひにははぢあへ給はず馴給ふ、といふ意也。

〔**新**〕ここは、すべての女御更衣たちの中をいふ内に藤壺もあれど、それは又次にいへり。

うちおとなび給へるに

〔**釈**〕他の女御更衣たちは、いづれも年たけておとなび給へる中に、藤つぼはいとわかしくつくしげなれば、源氏君にはちてねんごろにかくれ給へど、又自然に漏ては源氏の見奉り給ふ、と也。このところ、「いとわかしくつくしげにて」といへる上に、「藤つぼは」などの語なくては、いとまぎらはしく聞ゆ。

もり見たてまつる

〔**釈**〕「奉る」のるは、りの誤にや。下へかけて少し穏かならず。

いとあはれと思ひ聞え給ひて云々

〔**評**〕ものまぎれの端、ここにはじめてあらはれそめたり。母に似給へりと聞て幼き心にあはれのかかりゆくさま、げにさもあるべき情なり。

宮グウの女御のいとさがなくて、きりつぼの更衣の、あらはにはかなくもてなされしたためしも、ゆゆしう、とおぼしつみで、すがすがし

〔**コ**〕コキ殿

イヂワルク

著

ナンテモナク

うもおぼしたたざりけるほどに、きさきもうせたまひぬ。心ぼそき

先蹤

イマイマシツ

スツ

バリ

さまにて、おはしますに、ただわが女ヒメみこたちと、おなじつらに思

△御入内乙

ウチ

後

ヒ

七

心

ひ聞えん、といとねんごろにきこえさせ給ふ。さぶらふ人々御うし

△帝ヨリ

御子等

列

ろみたち、御せうとの兵部卿のみこなど、かく心ぼそくておはしま

シンセツ

女房たち

後

さましよりは、うちずみさせ給ひて、御心もなぐさむべくなどお

見等

イ

内裏住

親王

△アラ

ぼしなりて、まゐらせ奉り給へり。ふちつぼと聞ゆ。げに御かたち

△四宮ヲ

フシギナ

△更衣ニ似

フチツボ

分際

ナルホト

ありさま、あやしきまでぞおぼえ給へる。これは人の御きはまさり

△世入ノ

他ノ女御更衣たち也

貶

オシハレテ

て、思ひなしめでたく、人もえおとしめ聞え給はねば、うけざりて

あかぬ事なし。かれは人もゆるしきこえざりに、御心ざしのあや

タラヌ

免

△帝ノ

生

にくなりしぞかし。おぼしまぎるとはなけれど、おのづから御心う

憎

△帝ノ

紛

移

カクタンニ

移

つろひて、こよなくおぼしなぐさむやうなるも、あはれなるわざな

りけり

△帝ノ

去

△帝ノ

御供ニテ

せ給ふ御かたは、えはぢあへ給はず。いづれの御かたも、われ人に

おとらんとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、う

劣

△イヅレ

美

麗

△イヅレ

ちおとなび給へるに、いとわかしくしげにて、せちにかくれ給

モミナ大人

△藤ツボ方更衣ニ

似

△キキ玉

へど、おのづからもり見たてまつる。ははみやすどころは、かげだ

△藤ツボ方更衣ニ

似

△キキ玉

わかき御心ちに、いとあはれと思ひきこえ給ひて、つねにまゐらま

若

△藤ツボ方更衣ニ

似

△キキ玉

わ

△藤ツボ方更衣ニ

若

△藤ツボ方更衣ニ

うへもかぎりなき御思ひごちにて

**新**藤つぼと源氏とは、同く共に帝のおぼしめすごとと也。あやしくよそへ聞えつべき

**玉**或抄に、「藤つぼの、桐壺更衣によく似給へれば、源氏の御母ともよそへ云べきこちし給ふと也」といへる、よろし。いどのようにたりしゆゑ

**玉**「うせにし更衣のつらつきまみなどは、此源氏君とよく似て有し」のとたまふなり。湖月に、「藤壺と源氏と似給ひて」といへるはかなはず。「にたりし」のしは、いはゆる過去のしなれば、更衣の事ならではかなはず。

かよひて見え給ふも

**玉**これも「似て」といふ意にて、藤壺の御顔の、源氏君と似て見え給ふよし也云々。

にげなからずなん

**玉**よそへて母と申し、子といはんには、似げなきにあらず、と也。上に「あやしうよそへ聞えつべき」とあるをうけて、然聞ゆるなり。さてこの所、上よりの文の意をとほしていはば、うせにし更衣のつらつきまみなど、この源氏といとよく似て有しかば、又藤壺の源氏と似て見え給ふところも、あやしう母子ともよそへいふべきこちのすれば、しかよそへて母と申し、子といはんには、につかはしからざるにあらず、のとたまへるなり。**釈**此段右の説にてあきらか也。諸注いづれもとき得られたるはなし。さて、「なめしとおぼさで」とは、更衣を藤壺にならずへ給ふを無礼とおぼさずして、と帝のことわり給ふなり。

こよなう心よせ

**玉**他の女御更衣たちとは、かくべつにまさりて、藤つぼへは心をよせ奉り給ふ也。

うちそへてもとよりの云々

**評**人情まことに然なんありける。さて、上に更衣のうせ給ひて後、源氏君のかたちのめでたきにめでて、一度思ひゆるし給へるを、竟にこにて又もどのごとく御中よからず書なされたり。これかのよしあしの主客の脈なるが、ますます甚しくなりゆくさま、味はふべし。よにたぐひなしと見奉り給ひ云々

**新**これは、帝の藤つぼを見給ふ御心也。あまたの人を奉りつれど、か

名高うおはする宮

**新**これも同じ。藤壺の御かたちの名高きをいふ也。右と引つづけてよむべし。此名高きを挙て、それよりもまさる光君をいはん料也。或説に、弘徽殿の御腹の皇女たちを云、といへるはわろし。

ひかる君

**釈**容貌のめでたくうつくしくして、光るがごとき故に、光る君と世人の名けたり、と也。

かがやく日の宮

**釈**「ならび給ひて」は、源氏君に並び給ひて也。「御おぼえ」は、帝の御寵愛也。「かがやく」は、日の盛なるかたちをいふ。これも世人のつけたる也。

**評**光る君といふに相對へて、赫く日宮といへる、いとめでたし。これなん、此物語の中の主とある人たちなることを、先よく心得おくべし。

十二にて御元服し給ふ

**河**人生て十二を一周といふ。此歳冠礼する、和漢の例なり。礼記曰、天子之子十二而冠。

るたち

**新**居にも立にもなり。

かぎりあることに云々

**抄**一世の源氏、元服の儀式は定れる事也。それに猶事をくはへらるる也。御ひびき

**釈**何事にまれ、事ある時に世人の甚しくいひさわぐ事を「ひびき」といふ。世の響といふ意也。

所々のきやう

**抄**北山抄云、所々饗膳之事 王卿、庁女房別納、殿上藏人所、両亮、諸大夫、二百膳 穀倉院屯食五十具 庁別納各二十具 以上応和例云々。

穀倉院

**釈**無主・没官の田税・諸庄の物・銅銭の類を納めおきて、年中の饗などに充らるる所なり。おほやけ事につかまつれる

**玉**すべておほやけさまの事は、ただ定まれるあとのままにたがへじとまものみにて、ことに心をいれる事はなく、こまやかなるかたはなきものなれば也云々。

ほしうなづさひ、見奉らばや、とおぼえ給ふ。うへもかぎりなき御帝

思ひどちにて、なうとみ給ひそ。あやしくよそへ聞えつべきこち帝御詞

なんする。なめしとおぼさで、らうたうし給へ。つらつきまみなど無礼

は、いどのようにたりしゆゑ、かよひて見え給ふも、にげなからずな△藤下源上似

ん、など聞えつけ給へれば、をさな心ちにも、はかなき花紅葉につ△オホユル附

けても、こころざしを見え奉り、こよなう心よせ聞え給へれば、こ弘

きでんの女御、又この宮とも御中そばそばしきゆゑ、うちそへても湖藤の姫にそへて源をもに

とよりのにくさもたち出て、ものしとおぼしたり。世にたぐひなし△帝比類

と見たてまつり給ひ、名たかうおはする宮の御かたちにも、なほに△帝容貌

ほはしさはたとへんかたなく、うつくしげなるを、世の人ひかる君美麗

ときこゆ。藤つぼならび給ひて、御おぼえもとりどりなれば、かが赫

やく日の宮と聞ゆ『此君の御わらはすがた、いとかへまうくおぼせ源氏童形

ど、十二にて御元服し給ふ。みたちおぼしいとなみて、かぎりある居起

事に、ことをそへさせ給ふ。一とせの春宮の御げんぶく、南殿にて元年紫宸殿

ありしぎしきの、よそほしかりし御ひびきにおとさせ給はず。所々儀式貶

のきやうなど、くらづかさこくさうみなど、おほやけごとにつか内藏寮殺倉院

うまつれる、おろそかなる事もこそ、ととりわきおほせごとありて、仕△三テ△疎略

△アレ ベツダンニ 勅命

△母子トイハシニ

△ナド」カクベツニ 寄

ナシデモナイ チヨツトシタ

ナシデモナイ チヨツトシタ

ナシデモナイ チヨツトシタ

ナシデモナイ チヨツトシタ

ナシデモナイ チヨツトシタ

ひきいれのおとど

玉加冠の人をいふ。

湖其日、冠をめさせそむる人なり。もどりを引入る故なり。

みづらゆひ給へる

拾和名抄云、唐韻云、髻、和名毛止々利。髻也。四声字苑云、髻、和名美豆良。一云、訓同上。屈髪也。

余真淵云、束帯はあげみづらにし、直衣にはさげみづらにす。源氏今日はあげみづら也。ゆひやうは、雅亮装束抄にくはし。

大藏卿くら人

玉これは、大藏卿なる人の理髪役をつかうまつるといへるなれば、理髪にあたる詞あるべきに、なきは聞えがたし。されば、これは「みくし上」と有けんを、「くら人」とは写し誤れる歟。理髪を「御ぐし上」といふべきもの也。もし又、花鳥の説の如く、大藏卿にて藏人頭をかねたるよしならば、くら人の下に理髪をいへる詞の有しが、おちたるか。いづれにまれ、其詞なくては何事を仕奉るとも聞えず。

御やすみ所

花今案、一世源氏の元服にも下侍を以て休所とす。西宮抄に見えたり。

抄下侍とは、殿上の次を云。

御そ奉りかへて

花童体の時は、赤色の鬨腋の袍を着す云々。源氏君は無位なれば、縫腋の黄袍なるべし。

おりてはいし給ふ

新仙花門より東庭に出て拜舞と西宮抄にいへり。

釈堂下におりて帝を押し給ふなり。

皆人涙おとし給ふ

釈拜舞の様子おとなびてめでたきを感じて、いづれも落涙し給ふさま也。堂下にて押し給ふ故に、といふ説はわろかめり。

あげおとり

花わらははにてみめよき人の、冠して見おとりする事也。

ひきいれのおとどのみこばらに

孟葵上の母は、桐壺帝の御妹なり。依て「みこばら」といふ也。

春宮よりも御けしきあるを

釈御けしきあるとは、きはやかに奉れとおほせらるるにはあらで、内々にてしかせよとそそのかし給ふを云。ここは葵上を春宮へ参らせよとそそのかし給ひしを、源氏君へ奉らんとて思ひわづらひ給ひしなり。

うちにも御けしき給はらせ

新葵上を源氏に奉らんのよしを、帝へうかがひ奉りし事をいへり。然るを、帝此御元服のをりから、此御子の御後見のためにもなどもよほさせ給ふ也。

さふらひにまかで給ひて

釈上に「御休所」と有し下侍の所也。ここにて御酒まゐる。うち親王の御座の末に、源氏君着き給ふ也。

おとどけしきはみ聞え給ふ事

玉万水一露に、左大臣の、源氏に葵上の事をほめかし給ふをいへり、といへる、よろし。

きよらをつくしてつかうまつれり。おはしますとのの、ひんがしの

ひさし、ひんがしむきに御いたてて、くわざの御座、ひきいれの

おとどの御ざ、御前にあり。さるのときにぞ源氏まゐり給ふ。みづ

らゆひ給へるつらつき、かほのほひ、さまかへ給はんことをしげ

なり。大藏卿くら人つかうまつる。いとぎよらなる御ぐしをそぐほ

ど、心ぐるしげなるを、うへはみやす所のみましかば、とおぼしい

づるにたへがたきを、心づよくねんじかへさせ給ふ。かうふりし給

ひて、御やすみどころにまかで給ひて、御そたてまつりかへて、お

りてはいし奉り給ふさまに、みな人なみだおとし給ふ。みかどはた

ましてえしのびあへ給はず。おぼしまぎるるをりもありつるを、む

かしの事とりかへし、かなしくおぼさる。いとかうきびわなるほど

は、あげおとりや、とうたがはしくおぼされつるを、あさましうう

つくしけさそひ給へり。ひきいれのおとどのみこばらに、ただひと

りかしづき給ふ御むすめ、春宮よりも御けしきあるを、おぼしわづ

らふことありけるは、この君にたてまつらんの御心なりけり。うち

にも御けしき給はらせ給ひければ、さらばこのをりの御うしろみな

かめるを、そひぶしにも、ともよほさせ給ひければ、さおぼしたり。

さふらひにまかで給ひて、人々おほみきまゐるほど、みこたちの御

座のすゑに、源氏つき給へり。おとどけしきはみ給ふ事あれど、物

のつつましきほどにて、ともかくもえあへしらひ聞え給はず。おま

内侍宣言つけ給はり伝へて

〔釈〕内侍の女官、帝の宣言を承り、左大臣に伝へて御前へ召す也。内侍は掌侍なりといへり。

御ろくの物うへの命婦とりて賜ふ  
〔釈〕禄は加冠を勞ひ給ふ御禄なり。うへの命婦は、小櫛に「御前ちかくつかうまつる内命婦也」云々とあり。  
白き大つちぎ

〔新〕裕のうちきを二つ重ねたるを、大桂といふ。おほく「桂一かさね」とかくは、裕の桂一つに単を下にかさねたるなり云々。御ぞ一くだりと

は、御表衣・御下襲・御表袴と三つをいふべし云々。

いとぎなき云々

〔釈〕はじめてもどりを結ぶを初もとゆひといふ。世とは男女の縁の事にいへり。一首の意は、今加冠したる初もとゆひに、末長き縁を契る心をもむすびこめたりや。いかにと問かけ給ふにて、「むすび」はもとゆひの縁語、「こむる」は葵上の事をなり。  
むすびつる云々

〔玉〕三の句のにもじは、結句の下へふくめたる意有て、そこへかかるてにをは也。ふくめたる意は、紫の色しあせずは仰のごとく、もとゆひに

長き契をこめ奉らん、といふ意也。かく見ざればにもじ聞えがたし。

〔釈〕「ふかき」「あせず」など、みな濃紫の縁なり。「もとゆひ」は、紫の組たる糸なればなり。「心もふかき」とは、帝の仰のかたじけなきよしをそへたるにや。下句は、「源氏君の御心だにかはらずはなり」と旧注にいはれたるがごとし。

ながはしよりおりて

〔花〕御殿より南殿へかよふ廊なり。大内の時は、此所にきぎ橋有て、東庭におる道あり。引入のおどなども、此階よりおりて、御前の辰巳のかたにて御前に向て舞踏し侍るべし。

みこたちかんだちめつらねて

〔弄〕源氏の元服に禄を給ふ事は、東宮の御元服の時の儀を表する也。其時は諸卿ごごごく賜ふなり。

をりびつものこもの

〔細〕をりうづとよむ也。折に入りたる物也。

〔玉〕こものは籠物也。献物にはあらず。

〔釈〕籠に入たる菓子也。

右大弁なんうけ給はりて

〔釈〕右大弁なる人承りて、それぞれに仕奉らしめたる也。上に源氏君を鴻臚館へゐて奉りし右大弁なるべし。

〔抄〕右大弁勤仕例、天慶三年二月十九日、源清平。

とんじき

〔新〕台記春日語案、屯食幾十具、裏飯幾百とあれば、屯食をツツミイヒと有説は誤也。屯食は、今世に二重の台といふ物ぞ、其遺制ならん。

ろくのからびつ

〔新〕諸官に賜はる禄を入たる辛櫃なり。

〔花〕禄の辛櫃は、親王以下の元服にはこれをたてず、東宮の御元服の時

の事也。それ故、次の詞に「東宮の御元服のをりにもかずまされり」とあり。

そのよおとどの御さとに云々

〔釈〕御元服ありし当夜、左大臣殿へ、源氏君禁中より出て行給ふ也。さ

ほうとは、葵上と婚礼し給ふもろの儀式なり。

〔湖〕葵上は、源氏に四の兄なり。此年のましたる事ゆゑ、始終葵上には心おかせ給ふと也。

〔評〕案に、葵上の源氏の御心にそまめさまにいへるは、年のたけ給へる

故のみにあざざれど、これも其中の一つにはあれば、この説もすつべきにあらず。心得おくべし。  
ものあざやかなるに

〔釈〕父母いつかたにつけても種姓貴くして、他にすぐれ給へるを「あざやか」とはいへる也。「あざやか」は、俗に「はつきりとしたり」といふ意也。

へより内侍せんじうけたまはりつたへて、おとど参り給ふべきめし  
前 承 伝 召

あれば、まゐり給ふ。御ろくの物、うへの命婦とりてたまふ。しろ  
上 取 賜 白

きおほうちぎに御そ一くだり、れいのことなり。御さかづきのつい  
大 桂 領 例 益 序

でに、

いとぎなきはつもとゆひにながき世をちぎるころはむすびこめ  
帝 幼 結 籠

つや。御心ばへありておどろかさせ給ふ。  
キモチ キヨツケ

むすびつる心もふかきもとゆひにこきむらさきの色しあせずは。  
左大臣 濃 紫 浅

とそうして、ながはしよりおりてぶたうし給ふ。ひだりのつかさの  
奏 長 階 下 左 馬 寮

御うま、蔵人所のたかすゑて、給はり給ふ。みはしのもとに、みこ  
馬 鷹 居 御 階 親王

たち上達部つらねて、ろくどもしなじなにたまはり給ふ。その日の  
等 公卿 列 緑 差 々 賜

おまへのをりびつ物、こものなど、右大弁なんうけ給はりてつかう  
御前 折 櫃 籠 物 令

まつらせける。とんじき、ろくのからびつどもなど、ところせきま  
奉 仕 韓 櫃 所 狭

で、春宮の御元服のをりにもかずまされり。なかなかかぎりもなく  
カハツテ

いかめしうなん、その夜おとどの御さとに、源氏の君まかでさせ給  
嚴 阿利ケル 里 亭 退 出

ふ。さほうよにめづらしきまで、もてかしづき聞え給へり。いとぎ  
作 法 珍 似 氣

びわにておはしたるを、ゆゆしううつくしとおもひ聞えたまへり。  
幼 弱 ナベテナラズ 美

女君はすこしすぐし給へるほどに、いとわかうおはすれば、にげな  
葵上 少 似 氣

くはづかしとおぼいたり◎このおとどの御おぼえ、いとやんごとな  
左大臣 タフトキ

きに、はは宮、内のひとつ御きさいばらになんおはしければ、いづ  
葵上ノ母 帝 后 腹 下

かたにつけても、物あざやかなるに、この君さへかくおはしそひぬ  
鮮 明 源氏マデ 副

よの中をしり給ふべき

〔釈〕これは帝の御うへを申奉るごとく聞えて、いとまかしこきいひざまなれども、そのかみ撰関の事をかくさまにもいひし也。大臣の威権おもひやるべし。

宮の御はらは

〔釈〕宮とは帝と御一腹の三の宮にて、左大臣の北方を申すなり。その御腹の御子は、葵上とこのこの藏人の少将となり。この宮は、後の巻々に「大宮」としるしたるが御事、藏人の少将は、頭中将とつけたるが事也。くらうどの少将

〔釈〕近衛の少将にて、藏人頭に補せられたるを云。

〔評〕この一段、左大臣の威権をかたる序に、右大臣の末のいきほひを頭はし、且頭中将の伝を始めて出せり。此人、源氏君に相匹ひて何事にもめでたきさまに書たるが、始終少しつづつ劣りさまにかれたるは、巻中の主とある人ならねば也。正副の筆すぢ心を付べし。

あらまほしき御あはひどもならん

〔評〕左右の大臣の御中はよからねど云々せられたるは、げにかくあるべき御間から也と、地より評したる也。さてかくいふは、末にはさはあらで、彼此互に御中のわるき事をいはんとて先かくいひおく也。いと心ふかき書さま也。

さやうならん人をこそみめ

〔釈〕「見め」とは、我物にして明暮にあひ見る事也。此詞次下に多し。皆同じ。

おほいどの

〔釈〕大殿といふ事也。次々「い」もじをおとしたるは、今皆補ひつ。

〔評〕この段、藤壺の君を母に似たる人として恋しのび給へる心、やうやう移りて、我物として見まほしくおぼえ給ふ、といふ端を記したり。此脈次の巻どもにちらちらと見えたるが、つひに若紫の巻にいたりて純ばし出せり。さて又、ここに葵上の御心につかぬ事をも挿みて、後の伏線としたる、更にめでたし。正妻の心にそまぬからに、あだし人にいよいよ心の深まりゆく情、げにさる事になん有ける。

心にもつかずおぼえ給ひて

〔玉〕此上に詞たらず。脱たるにや。その故は、「さやうならん人」といふより「人とは見ゆれど」といふまでは、源氏君の心を直にいへる語、「心にもつかず」云々は、物語の地よりいへる語なれば、かならず其堺に云々「と」といふ詞なくてはとのはず。さるは、後の人の写すとおとしたる物か、はたもとより紫式部がとりはづして誤れるものか。此たぐひなること、巻々にをりをりある也。

御ひとへ心に

〔玉〕をさなきほどの心は、物をただ一すちに思ひて他の事にわたらぬをいふ。

おとなになり給ひて後は

〔玉〕元服し給ひて後は、といふ事也。

みすのうちにも

〔新藤〕つばのみすのうちにも也。

〔釈〕上に「御どもには、やがてみすのうちにいれ奉り給ふ」とありし首尾也。そのかみの礼儀、思ひやるべし。

琴笛のねに聞かよひ

〔新琴〕は藤つば、笛は源氏の物の音にあつる説、よし。次下にも似たる事あり。凡、和漢ともに物の音によりて情をかよはずことおほし。

つみなく

〔釈〕源氏君の幼き故に、たえだえなるをも何の罪なき御心と左大臣の思ひゆるし給ふ也。

もとのしげいさを

〔釈〕もとのとは、故の更衣のおはしし所といふ意也。みぎうしは、源氏君のおはします御局とし給ふ也。

ははみやす所の御かたがたの

〔玉〕御かたがたとは、更衣の局と母の里につかへし人らをいへるか。

れば、春宮の御おほぢにて、つひに世中をしり給ふべき、右のおと

外祖父

宛

知

どの御いきほひは、ものにもあらずおされ給へり。御子どもあまた、

威権

ナンデモナイヤウニ 庄

△左大臣ノ

はらばらにものし給ふ。宮の御はらは、藏人の少将にて、いとわか

腹々

＊

腹

若

うをかしきを、右のおとどの、御中はいとよからねど、え見すぐし

ウツクシキ

△左大臣ノ

好

給はで、かしづき給ふ四の君にあはせ奉り、おとらずもてかしづき

大セツニシ

配

△源氏ニ劣

たるは、あらまほしき御あはひどもになん『源氏の君は、うへのつ

＊草子地

交際

上

ねにめしまつはせば、ころやすくさとずみもえし給はず。心のう

常召

ウチトケテ

里住

ちには、ただふぢつばの御ありさまを、たぐひなしと思ひ聞えて、

比類

＊さやうならん人をこそみめ、にる人なくもおはしけれかな、おほ

アノヤウ

似

＊大

いどのの君、いとをかしげにかしづかれたる人、とは見ゆれど、心

殿

葵上

にもつかずおぼえ給ひて、をさなきほどの御ひとへごころにかかり

着

＊

一偏心

て、いとくるしきまでぞおはしける。おとなになり給ひて後は、あ

苦

＊

大人

りしやうにみすのうちにもいれ給はず。御あそびのをりをり、こと

ジメノゴトク

御簾

入

遊楽

＊琴

ふえのねにききかよひ、ほのかなる御こゑをなぐさめにて、うちず

笛音

間通

カスカ

△キクマタノシニ

内裏住

みのみこのましうおぼえ給ふ。五六日さぶらひ給ひて、おほいどの

好

＊

幼稚

に二三日など、たえだえにまかで給へど、ただいまはをさなき御ほ

退

＊

どに、つみなくおぼしなして、いとなみかしづき聞え給ふ。御かた

＊余イよろフ△

營

がたの人々、世中におしなべたらぬを、えりととのへすぐりて、さ

ナミナミナラヌ

扱

調

勝

ぶらはせ給ふ。御心につくべき御あそびをし、おふなおふなおほし

△源氏ノ

遊戯

＊

ネンゴロニ

いたづく◎うちにはもとのしげいさを御ざうしにて、ははみやす所

勞

内裡

＊

淑景舎

曹子

＊

母

さとの殿は

〔細〕更衣の里也。後に二条院といふ也。

すりしきたくみづかさ

〔釈〕修理職・内匠寮也。共に令外の官なり。殿舎の破壊をつくりひ、工匠の事を司どる職なり。

になう

〔新〕似る物無てふ語なり。六帖に「似なき思ひ」といふ題にて歌どもあり。みなその意也。

いけのころ

〔河〕楼額題「鷓鴣」池心浴「鳳凰」 白氏文集

〔釈〕この漢文をよみて、いけのころとはいへるなり。他にも例あり。さて「心」といふより「広く」といへるは、縁なり。

かかる所に思ふやうならん人を云々

〔細〕大かた思ふやうなる人をとなり。また藤つぼの心あり。

〔花〕つひにはねがひのごとく、紫上を後には二条院にすませ給ひし也。

〔新〕葵の、源の御心にいらねば也。

〔釈〕案に、大かたこの説どものごとき意なり。其中に紫上の事はここにてはまだあらはれぬ所なれど、かの上はすべて藤壺のかはりに見給ふ意なれば、ここにその端を発かれしなるべし。いとくみなり。

ひかる君といふ名は云々

〔新〕前に、世の人、光る君といへるは、其もと高麗の相人がなづけ申しよりいふとの意を、爰にてあかすなり。語を前後にしていふも、文の一つなり。両説也といふ注は、文を心得ぬ人のさだなり。

〔玉〕補「かかる所に思ふやうなる云々、おぼしわたる」この語勢すでに結びのさまあり。かくて又光る君云々といひて、前の文のこまうどを引うけ、又次の巻の書出しにつづくやうにして結びたるさま、いはんかたなく面白し。この結びたるやう、漢文にては、左伝の七月之卒章蔵氷之道、孟子の能言趾「楊墨」などによくいたり。すべて此書巻々の結びに、皆こころしたり。味はふべし。

〔評〕この説どものごとし。旧注は、よしなきことのみ多し。この鈴木氏が説は、殊にとき得たりといふべし。げにも巻々の結びの詞は、作者の殊に心せられたりと思ゆる中に、この巻は源氏君の本伝のごときものなるからに、殊さらに光る君といふことの伝へを委くして結ばれたるもの

とおぼし。さるは、上にもいへることく、かの相人がいへる事は、源氏君の一代のうちにあるべき吉凶禍福をあらかじめ定めたるにて、一部の大きな眼目なれば、光るといふ名もかれに名づけさせんは、おのづからの命数にもあづかるべければ、殊にかくいひあらはして結め、さて帚木巻に光る源氏云々とかき出べき結構をのこされたるなるべし。かへすがへすいみじともいみじく、めでたしとめでたき書きまなりといふべし。さて、末に「となん」とあるは、人の物語したるを聞いて記したるさまに通れたるにて、「云々と、其世より今の世まで世人のいひ伝へ来れる也」となん、人のかたりしを聞侍りし」とやうに含めのこしてとちめたる也。此例、次々にいとおぼし。深く用意せられたる事なるべし。文の前後の次第は、新釈のごとくなるべし。

の御かたがたの人々、まかでちらずさぶらはせ給ふ。さとの殿は、

〔\*〕里

〔\*〕修理職

すりしきたくみづかさ

〔内〕匠寮

〔セム〕ジ

〔下〕

〔\*〕タケヒナウ

〔改〕

〔造〕

給ふ。もとのこたち、山のたたまひ、おもしろきところなるを、

〔モト〕ヨリノ

〔木〕立

〔ツキ〕山也

〔カ〕ツカウ

池のころひろくしなして、めでたくつくりののしる。かかる所に、

〔心〕広

〔為〕成

〔造〕

〔サワ〕ゲ

〔\*〕源心

おもふやうならん人をすゑてすまばや、とのみなげかしうおぼしわ

〔オ〕キ

〔バカ〕リ

〔歎〕息

たる』ひかる君といふ名は、こまうどのめで聞えて、つけ奉りける

〔光〕

〔高麗〕人

〔賞〕

〔号〕

とぞ、いひつたへたる、となん。

〔言〕伝

〔△〕キキ侍リシ